「TFU 教育フォーラム 2023」 記録集(報告書)

2023年12月2日(土)(対面・オンライン開催)

主催:東北福祉大学教育学部/東北福祉大学大学院教育学研究科

後援: 宮城県教育委員会/仙台市教育委員会/河北新報社

目次

TFU 教育フォーラム 2023 概要	
教育学部長の挨拶	
教育学科長の挨拶	
教育学研究科長の挨拶	4
第 1 分科会(幼保)	5
第 2 分科会(小学 A)	10
第 2 分科会(小学 B)	20
第3分科会(中等社会)	24
第 4 分科会(中等英語)	30
第 5 分科会(特別支援)	36
TFU 教育フォーラム 2023 総括	43
学生実行員名簿	45
TFU 教育フォーラムのあゆみ (2012 年度~2023 年度)	47

TFU 教育フォーラム 2023 概要

1. 2023 年度テーマ

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」

2. 大会趣旨

近年、社会の有様は大きく変化し、未来は予測困難となってきています。そのような時代に生きる子供たちは、今まで以上に自分のよさや可能性を認識し、また同時に多様な人々と協働しながら、持続可能な社会の創り手となることが求められています。いうまでもなく学校教育のさらなる充実は喫緊の課題です。

本フォーラムでは、それぞれの現場において工夫された実践等について話題提供していただき、その上で、近い将来を見据えたあるべき学びのスタイルを模索していきたいと考えます。

3. ねらい

- 1)卒業生を対象に、日頃現場の中で感じている多様な悩みなどについて、本学教員が中心となり解決の方策を共に探ることを目標に、卒業生のリカレントの機会とする。
- 2)大学と卒業生及び現職教員との交流を図ることで、現場での課題の解決策を共に見いだす。
- 3) 在校生が保育・教職への理解を深めることを通して、その資質向上に寄与する。

4. 日時・時程

(1) 日 時 令和 5 年 (2022) 12 月 2 日 (土) $13:00 \sim 16:00$

13:30

(2) 時程

12:30 13:00

		校種(教科)別分科会	<u> </u>	
受付	開会行事	第1:幼保	第 2:小学校 A	第2:小学校 B
		第3:中高(社会)	第4:中高(英語)	第5:特別支援

16:00

5. 実施方法

対面(本学国見キャンパス教室)及びオンラインによるハイフレックス方式

教育学部長の挨拶



東北福祉大学 教育学部 学部長 石原 直

令和5年度の教育フォーラム開催に当たり、ご挨拶を申し上げます。

現在、教育を巡る様々な課題が指摘されております。不登校の増加やいじめなどの様々な非行の増加。通常学級における9%にもおよぶ発達障害に類する子どもたち。多岐にわたる教員の過重労働。とりわけ保育士・教員の処遇改善に関しては、遅々として進まず、もはや個々の保育士・教員の努力や精神論で解決できるものではありません。

教育は国家の根幹を成すものと言われ続けてきたなか、文部科学省においても様々な施 策がとられようとしておりますが、残念ながらどれも根本的な解決法では無く、対処療法に なっている点に憂いを覚えます。

本学の教育理念は、自利・利他円満。すなわち、互いにに支え合いながら、ともに幸せになるために。であり、教育学部の目指すのは、特別支援教育の理念や手立てを学び、実践活動やボランティア活動を通して、学校現場を理解していくことで、共生社会を構築できる人材を育成していくことです。

このような中、東北福祉大学の学生や卒業生は使命感と教育愛を持って様々な場所で奮闘しています。この一人一人の想いや願いに応えるためには、私たち教員は覚悟を持って取り組むことが必要であると考えます。

その一つの取り組みが、本フォーラムです。本学を卒業した皆さんやこれから教育や保育の世界に飛び込もうとしている学生さんたちが、一堂に会して今の保育・教育の課題を論じ、そこから様々なことを学ぶことを通して、これまで取り組んできたことに対する確かな手応えや自信を得、明日からの保育・教育の新たな道に進んでいく。それはささやかな、かすかなものかもしれませんが、やがて大きな光のシャワーとなって子どもたちに降り注いでいくことになるものと期待してやみません。

最後になりましたが、本フォーラムにご参加いただいた皆様、準備や本日の係などをして いただいた学生さんや先生方に心から感謝申し上げ、挨拶といたします。

教育学科長の挨拶



東北福祉大学 教育学科 学科長 大西 孝志

本日はお忙しい中、「TFU教育フォーラム 2023」へ足を お運びいただきありがとうございます。新型コロナウイルス 感染症の大流行を契機に、このフォーラムも昨年度よりオン

ライン方式同時開催となり、より多くの方に参加していただけるようになりました。小学校等においてもタブレットの活用が一般的になった現在、このように対面方式とオンライン方式の同時開催によるフォーラムの継続は、準備等に手間がかかるものの参加者のみならず実行委員会の学生の皆さんにとって、必ず役に立つものを身に付けることができると信じております。

さて、先日、今年度の学校基本調査の結果速報が公表になり、その中で東北・北海道の特別支援学級の増加が取り上げられていました。宮城県においては児童生徒数の減少、学校の統合による閉校が進む中、特別支援学級は増加し、令和5年度は小学校28、中学校13の特別支援学級が新たに設置されという結果が明らかになりました。また、東北・北海道で最も多くの特別支援学級が開設となった福島県では小学校44、中学校29、合わせて73の特別支援学級が新設になりました。つまり、令和5年度は宮城県で41人、福島県で73人の特別支援学級の担任が必要になったということです。

次に不登校に対しての取組では、今年度4月宮城県に2つの学びの多様化学校(いわゆる不登校特例校)が開校し、県内には計3校の特例校が設置となりました。学びの多様化学校は学校教育法施行規則第56条に基づいた、特定の学校を指定し、そこにおいては教育課程の規準(学習指導要領)によらない特別の教育課程を編成し教育を実施することができる学校です。

特別支援学級や学びの多様化学校の新設は「一人ひとりのニーズに基づき」「実態把握を丁寧に行い」「個に応じた指導と支援を」行うという時代の要請を受けての流れだといえます。児童生徒数が減少しても、多様なニーズに対応できる学びの場が必要になっているという現状においては、本学教育学部の学びの柱である「特別支援教育」はこれからもますます求められ、この専門性を身に付けていることはどのような職業に就いても必ず役に立つと思います。10年後、20年後はどのようになるのか、まだまだ先を予測することは難しいですが、皆さんには是非、「多様性に対応することができる人」になっていただきたいと思います。

終わりになりますが本日の開催にあたり、ご尽力いただきました、講師、助言者、話題 提供者、学生スタッフの皆さん、参加くださった皆様に感謝申し上げ、挨拶とさせていた だきます。

教育学研究科長の挨拶



東北福祉大学大学院教育学研究科 研究科長 朝倉 充彦

「教育フォーラム 2023」に多数の方々にご参加いただき、誠にありがとうございます。

今回の教育フォーラムは12年目迎え、その存在が内外に周知されてきているのではないかと自負しております。

「フォーラム」の語源は、「公共の場」という意味をもつそうですが、コロナ禍の対応として実施されたオンラインでの参加も可能となったことを鑑みれば、本学キャンパスだけでなくネット空間も含むより開かれた公共の場となりました。今回もより多くの方々にとって保育・教育について語り合い学び合う場となることを期待します。

さて、今回のフォーラムのテーマは「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を目指して」です。このテーマにある「個別最適な学び」については、日本の教育史を振り返ってみると、100年以上前から議論されてきました。例えば、大正新教育では個性尊重の教育が叫ばれ、個別化と個性化の理論と実践が展開されました。その個別化が孤立化にならないか危惧され、どう克服するかが課題となっていました。それゆえ、今回の教育フォーラムのテーマは、普遍的テーマであるともいえましょう。このフォーラムで多くの実践と知見が紹介され、活発な議論がなされることと思います。

教育フォーラムは在学生にとっては保育・教育の現場を知る貴重な機会となるでしょう。現職教員の方々にとってはリカレント教育の場となるでしょう。このフォーラムは年一回の開催ですが、今後保育・教育について語り合い学びあう場を作っていくきっかけになれば、と思っています。現職の方々はこれまで数多くの研修を受けられてきたと思います。この教育フォーラムを契機に「助言・指導型」ではなく、「対話・共感型」の「語らいと学びのカフェ」のような場が将来設けられれば、望外の喜びです。

最後に、今回の教育フォーラム開催のためにご尽力いただいた先生方や学生の皆さんに 感謝申し上げ、私の挨拶とさせていただきます。

第1分科会(幼保)

司会:佐藤 真衣, 庄司 和香

参加者 卒業生:4名 在学生:221名 本学教員:8名 計 233 名 第1分科会では、4年学生「発達プロジェクト」からの発題に対し、講師2名から講評を頂き、参加学生 との質疑応答、プロジェクトメンバーとの応答等の交流が行われた。



1、早川 陽太郎先生 (2016 年度子ども教育学科卒 認定こど も園みどりの森)

早川先生は、担任する5歳児の「草木染め」から発展する一連の活動の事例を基に、子どもの主体性の捉えについてご講評いただいた。その中で、子どもの発見を拾い、広げていくことが主体性を育むうえで大事であると話した。

質疑の様子

早川先生の講評の際に扱われた事例について、学生から「保育者としてどこまで介入するのか」という質問が挙がった。それに対して、達成するためにどのくらいの大人の力が必要なのかを推しはかるのが大切であると話した。クラスの全員で達成感を持てるよう、意図をもって話し合いの場を設け、話し合いが始まったら、待つ姿勢を大切にしていると語った。また、「事例のほかに主体的に行っていることはあるか」という質問が学生から挙がった。それに対して、著書である『学びが深まる実践へ1』に火起こしの活動について示されていると話した。年長児による火起こし部10人が園内の火をおこし活動する中で、「頑張れ!」「あともう少し!!」と活動に加わらなくとも応援に回る子どもも見られた。直接参加する子ども、間接的に関わる子どもどちらも主体的な姿であると語った。



2、奥田 昌樹先生(宮城県名取市立ゆりが丘小学校)

奥田先生は、『幼・保・こども園との連携と「子ども主体」について』をテーマに、小学校教諭からの視点でご講評いただいた。その中で、実際に小学校で行っている「主体性」に関する取り組みを事例として紹介して頂きながら、社会で求められている主体性とは、「自分で考え、判断し、責任を持って行動する力」であると話した。

感想

発達プロジェクトの発題を基とした、早川先生と奥田先生のご講話を聞き、子どもの主体性について多様な視点から考えることができた。今後保育に携わる立場として今回の学びを生かし、子どもの意欲を高め、生きる力を育む幼児教育について更に探求したい。

(3年 高田 奈々・岩城 綾音・下舘 瑛佳・安田 佳音)

第1分科会 発表要旨

幼児期における豊かな体験とは~子どもの主体性に着目して~

20ET027 遠藤青風 20ET069 熊谷有紗 20ET078 近桜良 20ET086 齋藤かすみ 20ET137 髙橋未来

1. テーマ設定の背景

月に1度、行っている発達プロジェクトのミーティングの中で、TFU 教育フォーラムにおいて学びたいことやより理解を深めたいことについて話し合う時間があった。その際に、プロジェクトメンバーの一人が、小学校の教員をしている母親から聞いた「遊びは学び」という言葉が印象に残っていると話したことがきっかけとなり、なぜ乳幼児期に「遊び」が大事なのかという疑問を抱いた。保育所保育指針等には「遊び」において「豊かな体験を育む」ことが大事だと示されている。そこで、「豊かな体験を育む」とは具体的にどういうことなのかを知りたいと思い、今回のテーマ設定に至った。

2. 研究方法・内容

まず、今回のテーマ「豊かな体験」より、保育における「豊か」とは何か、また、豊かな体験を育むために重要な3つの内容—①生活や遊びを通した総合的な保育 ②環境 ③子ども主体について保育所保育指針等をもとに取り上げ、文献調査を行った。その中でも特に「子ども主体」についてより理解を深めようと考え、主体性に関する内容について研究を進めることとした。そこで、主体性の発達や概念、捉え方について文献調査を踏まえながらまとめ、理解を深めた。その結果、生活や遊びの中で、「子ども主体」やそのために必要な保育者の関わり等を通して、「豊かな体験」が育まれていくことが分かった。また、「子ども主体」と小学校との連携について、どのようなことが重要なのかについても取り上げ、幼保小の連携に関して学びを深められるようにした。こうした文献調査を踏まえ、早川陽太郎先生(認定こども園みどりの森保育教諭)には、主に「子ども主体」とは何かについて、園で行っている取り組みをご紹介いただきながらご意見を伺った。また、奥田昌樹先生(名取市立ゆりが丘小学校教諭)には、幼保と小学校との連携を具体的にどのように行っているのかについてお話を伺った。これらの学びを通して、保育における豊かな体験とは何か、子どもの主体性に着目してまとめた。

3. 考察

(1) 保育における「豊か」

坪井敏純氏の著書「子どもの主体的な活動を生み出す環境を作る」によると、「豊か」とは、単に"広い"や"多い"という意味ではなく、「物的にも人的にも豊かであること、子どもの視点を大事にして自然や遊び環境を工夫することにある」とあげられている。自然や遊び環境の工夫とは、子どもが主体的に関わり、遊びの深まりや広がりが生まれる応答性の高い環境を作る試みを意味すると示されている。

(2) 子どもの主体性

北海道大学教員の川田学氏は、「乳幼児期の子どもは大人の用意した環境や選択肢の中で自己決定をし、大人や他の子どもたちと影響しあって行動する」という考えから、「主体性=関係」論(子どもの主体性は周囲の人、モノ、出来事との関係においてのみあらわれる)を提案した。その考えから、すべての子どもに常に何らかの主体性があると述べた。つまり、主体性とは『自分で決める』『能動的に行動する』『活発に活動する』といった、見るからに積極的な姿を必ずしも意味しないということがポイントとなる。そして、「主体性が弱いように見えるときは、子どもが新しい関係を探しているときであり、相手や環境と新しい関係を結び直そうと試行錯誤している過程である。」とも述べている。このような視点から、一見マイナスに見えるような消極的な姿や逸脱行為も、子どもが他者や環境との関わり方で模索している主体的な姿と捉えることができる。

(3) 幼保小の連携

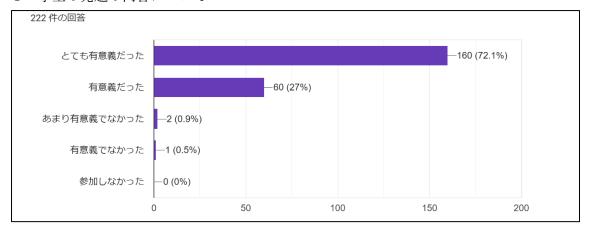
幼保小の連携について、汐見稔幸氏は「子ども主体」と「集団生活」の関係についてのインタビューの中で「幼児期の子どもたちが遊びの中でどう相談しているのか、つまずいた時にはどうしているのか、そういうやり方を幼稚園や保育園、認定こども園等でどこまでやってきているのか、これから小学校に通う子どもたちが、どういう成長過程を経ているのかを小学校の先生に把握してもらうことが、幼保小連携で一番大切なポイントである」と答えている。学校では、みんなが椅子に座っていなければならないため、その雰囲気を苦手に感じてしまい、心が不安定になることがある。気になる子どもや発達障害等による対人関係の難しさが不登校の主な原因の一つになっていることから、汐見氏は、不登校の子どもたちを「うまく適用できない子」とネガティブに評価するのではなく、「あの子にはこんな個性があるよ」と肯定的に捉えていくことが大事であると述べている。

4. まとめ

今回のテーマである「幼児期における豊かな体験を育む」ために、まずは保育者が、子どもの興味や一人一人の主体性を理解し、子どもの姿を捉えることが大切である。そして、その子どもの主体性を踏まえ、保育者は自身の願いを明確にすることが必要になってくる。本研究を通して、保育者は子どものどのような姿や言葉からでもその子どもの「主体性」としての思いを探る必要があると分かった。だからこそ、子どもの主体性を捉えるポイントは、それぞれの、その時々の子どもがどのような心情で、どのように周囲の環境と関わりをもっているのかを丁寧に読み取ることなのではないかと考えた。そして、そのような視点をもったうえで、子どもの今もっている主体性がさらに発展していくような援助や関わりを行うことが大切なのではないかと考えた。次に、保育者が子どもにやらせるのではなく、「子ども自らがやってみたくなるような魅力的な環境を作ること」が非常に重要となる。子ども自身が興味を持ってその環境に関わるからこそ、「もっとやってみたい」という気持ちが育まれていくと考えた。そして、遊びが徐々に深まっていく、または今の子どもの興味や発達に合っておらず、遊びが深まらない時には、子どもの姿や保育者の願いを捉え直し、環境を再構成していくことが必要となる。その環境は、子どもと保育者が共に創り上げていくことが重要である。この繰り返しが、「豊かな体験を育む」ことに繋がっていくのではないかと考えた。

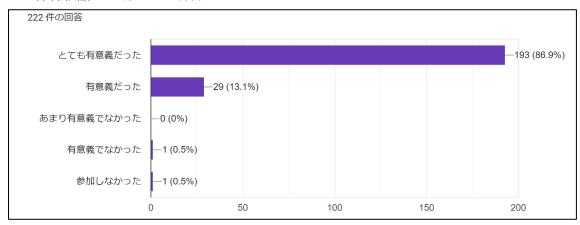
第1分科会 アンケート結果

1 学生の発題の内容について



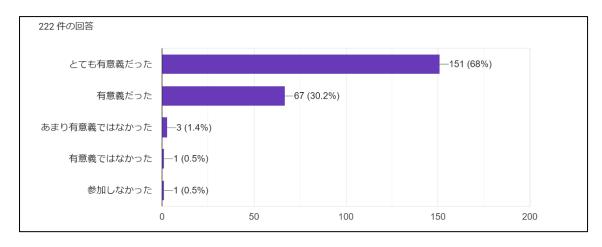
- ・積極的に動いている子どもだけが主体性を持っている子どもではなく、周りで応援している子ども、周りで見ている子どもも主体性を持っていると言えることがとても印象的だった。そういった子どもの主体性に気づき、伸ばせる保育者になりたいと思った。
- ・主体性の 4 つの段階がとても印象に残った。自分でするという行動だけでなく、させてあげるなど友達など周りとの関係も含めるということに感銘を受けた。
- ・保育現場と小学校では小学一年生の捉え方が違うという話が印象的だった。保育現場は小学校で活かせる主体性を磨いて、小学校は磨かれた主体性を発揮できる場であるべきだと感じた。

2 保育教諭の立場からの助言について



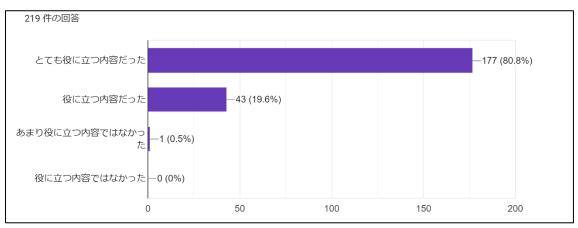
- ・一部の子どもから主体的に自分のしたいこと、挑戦したいことから徐々に周りの子どもへの影響していき、クラスに一体感を持たせることができるのが子どものやりたい気持ちの力なのだと感じた。クラスにいる子ども全員が主体的に活動するということは話を聞いて確かに難しいと感じた。そのようなアプローチは時によって、子どもによって違うと思うので、よく子どもを見る保育者の観察力やアプローチ力が必要だと感じた。
- ・「豊かな体験とは」という質問に対しての回答の中で、「子どもたちの中で大きな存在になっている」という言葉があり、同感した。「このようなこと」と言葉で表すよりも、子どもの行動そのものをそのように受け止めていることが、その後の保育に繋げるためにも大切なことだと感じた。

3 小学校教諭の立場からの助言について



- ・小学校に勤めている先生方が、「何も出来ない1年生」ではなく、「何でもできる卒園生」という認識を もってくれていることがとても嬉しく思った。卒園をゴールと捉えるのではなく、その先にまで目を向 けて関わっていくという心構えをもっていきたいと考えた。
- ・幼稚園と小学校との目的や形態の違いや、主体と自主の違いを明確にすることで、子どもが何のために 学ぶのかの意義を考えながら教育することの大切さを学んだ。

4 フォーラムは教育・保育現場で役立つ内容だったか



- ・曖昧な考え方、人それぞれの考え方が存在するようなテーマで、とても難しい議題だったが、同じ学生 の方や講師の方のお話を通して理解を深められるようなプログラムで、とても有意義な時間を過ごすこ とができた。
- ・保育実習が終わり、子どもの主体性とは何か学び直している段階であり、とても勉強になった。ディスカッションでは、多学年と意見を交わす環境ができていて良かった。

第2分科会(小学A)

参加者 卒業生:26名 在学生:85名 計 111 名



1. 清野弘平先生 (七ヶ浜町立亦楽小学校) 清野先生は、一斉授業が基礎学力、学級づくりの根幹であると述べていた。一斉授業のメリットは共通理解を促すことだ。一方で、デメリットは児童が受け身になってしまうことである。授業の導入の際は選択肢を提示し、立場を明確にすることを行っている。挙手は確認のための手段として行い、指名は全員を当てるために行うと報告した。

質疑の様子

指名した児童がうまく話せないときはどのように対処するかという質問があった。清野先生はその問いに対して児童が答えられるように毎日繰り返し行っていくことが大事だと答えていた。4月の段階ではほぼ答えられる児童は少ないが、12月ごろには活動を繰り返せばほぼ全員が指名されたとき答えられるようになっている。最初に答えることができなかった児童がいた場合、周りの児童に「みんな○○さんはなんて書いたのだと思う?」と聞いて予想させる。みんながその児童に注目し、答えられなかった児童に聞くことで、児童は自分の考えを伝える方法を周りから見聞きして覚えることに繋がる。



2. 河村裕晃先生(大崎市立古川第四小学校) 河村先生は今望まれる授業づくりとは、一人でも誰かと学べる環境を整えることが大切だと述べていた。個別最適×協働的な授業を教科に取り入れることで、普段休み時間などはあまり関わらない児童も授業では協力し合い、関係性を深め合うことができる。

質疑の様子

自分から声をかけられないで1人でいる子に対する対処について質問があった。河村先生が児童に「誰か一緒にやってくれる人!」と聞くと、大体クラスの気の利いた児童が「一緒にやろう」と言ってくれるそうだ。また、友達と練習を行う際、ふざけたり関係ない話をしたりする児童にどのように指導するか質問があった。それに対して、まずは見守って何も言わない。活動を行う上で脱線してしまうのは仕方がないことで、最終的に話し合いに戻って練習を行い、質のいい発表ができるなら多少の会話は構わないということだった。

【感想】

一斉授業と個別最適×協働的な授業について深く知ることができた。一斉授業、個別最適×協働的な授業のメリット、デメリットを理解し、教科によって授業構成を変える必要があると思った。全員の意見が聞きやすい国語や道徳では一斉授業を行い、算数や音楽など個々の技術を要する教科は個別最適×協働的な授業を取り入れたい。(3年 佐藤 泉)



3. 塚野駿平先生 (新潟小学校) 塚野先生は、一斉授業と個別最適×協働的な授業の在り方・考え方について、それぞれの良さや課題に触れながら取り上げた。特に国語科や算数科で、授業の特性、教科との相性、児童の実態を把握し、これらをもとに授業を構成しながら本時の学習内容に繋げていると報告した。

質疑の様子

「塚野先生が挙げた授業の特性、教科との相性、児童の実態の三つの観点の中で、判断材料がなく、どのように授業を構成すればよいかが分からない場合、最も重要だと考えるのはどの観点か。」という質問があった。回答として「まず教科書を軸に授業を考えるのは必須であり、加えてその三つの中であれば児童の実態が最も大切である。」と話していた。児童の実態によっては、同じ授業でも一斉授業と個別最適×協働的な授業のどちらが適しているかは変化するとのことである。「どのような方法が児童に合っているのかを日々考え、失敗しながら方法を選んでいくことが大切である。」と話していた。



4. 大内秀先生 (シンガポール日本人学校チャンギ校) 大内先生は、ICT 活用が個別最適×協働的な学びの授業を加速させることについて取り上げた。そして、GIGA スクール構想にも触れ、教育を DX 化していくためにも、「SAMR モデル」を用いながら、教員から児童に ICT を活用した学びを繋げていくことを社会科の実践と合わせて報告した。

質疑の様子

「低学年に対するICT の活用方法はあるか。」という質問があった。回答として「幼い年齢のうちは、実物に触れることが大切である。カメラ機能などを用いて観察する程度にし、学年や年齢に合った使い方をしていく必要がある。」と話していた。また、「大内先生の実践にあった動画制作のみでは知識に関する評価がつけられないと考えるが、それはどのように対応しているのか。」という質問では、「現段階では児童が制作した動画などから知識を判断できる評価基準がないため、紙のテストで行っている。教え合いの効果から点数も伸びている。」と話していた。

【感想】 児童と教員ではICT の活かし方に大きく違いがあることに気付くことができた。ICT を取り入れる目的を明確にもてるようにしていきたいと感じた。また、一斉授業と個別最適×協働的な授業をそれぞれ児童の実態に合わせて、学習がより質の高いものになるよう、よく観察して判断できる教員になりたいと思った。(3年 佐藤 由瑞穂)



5. 高橋恵大先生(仙台市立市名坂小学校)高橋先生は、「授業づくりと教師」について、教員採用試験合格後、現場で理想と現実の差に悩まないようにするために必要なことを2つ取り上げていた。まず、「学び続ける姿勢を持つこと」では、教員になった後も学習会や研究会に参加し、インプットとアウトプットの機会をつくることの大切さを挙げた。次に、「自分を知ること」では、

「一日予定表」や「シンプルカレンダー」の活用などで自分のキャ

ラクターを知り、価値観を明確にすることで自分に合った授業スタイルを考える大切さを挙げていた。

質疑の様子

高橋先生のおすすめの本は何かという質問が挙がった。質問に対して高橋先生は、2冊の本を紹介した。 最初に、上條晴夫先生の本を紹介していた。高橋先生は本学に在学中、上條先生のゼミに所属していた。 実践的なアイディアが多い上條先生の本は、現場でもおすすめであるとおっしゃっていた。次に、『子ど もたちをどう理解するか。一教師も楽になる新しい見方』(著者:金大竜、東洋館出版社)という本を紹 介していた。

【感想】

教員になることが目的ではなく、自分が目指す理想の教員になるために学び続ける姿勢と自己理解の必要性を学ぶことができた。私自身、自分の専門性を持って現場で勤務するようになった後も、その専門性を日々高められるような場を大切にしたいと思った。

(3年 三塚 麻由)

いま望まれる授業づくりとは ~一斉授業のスキル~

清野 弘平(宮城県・七ヶ浜町立亦楽小学校・2016年度卒)

1. 実践の背景

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」(文部科学省 2022)では、『2020 年代を通じて、実現すべき令和の日本型学校の教育の姿は①個別最適な学び②協働的な学びの 2 点である』と示している。しかし、個別最適な学びや協働的な学びだけでは、「どうやって学ぶのか」「何を学ぶのか」という「学び方」が分からず、学びを成立させることは難しいと感じる。そこで単元の中に一斉授業で全員が「学び方」を身に付けられる場面を取り入れることで、「主体的・対話的で深い学び」は実現できると考える。以上のことからまず教師が身に付けるのは一斉授業のスキルだと考える。

- 2. 実践の方法・内容 ~5年算数「分数」の授業実践を通して~
- ○本時の目標
- ・異分母の分数の加減計算について、分母をそろえることの意味を考え、説明することができる。(1/8)
- ○本時で意識した一斉指導のスキル
- ・既習事項(4年生での学び・前単元での学び)を端的に押さえる。
- ・「発問-挙手-指名|をせずに、「発問-指名|の方式で進める。
- ・AかBのどちらか、など自分の立場を明確にさせる発問をする。
- ・子供の視線を意識した話し方や立ち位置、板書のタイミングを工夫する。
- ・主発問や補助発問、指示など教師が授業の中で発言を精選する。
- ・指示はまとめず、指示⇒行動⇒指示⇒行動と細かく指示をする。

3. 考察

本実践を通して、自身が学んだことは以下のことである。

①子供を傍観者にしない

子供を授業の傍観者にしないことが一斉授業をする上で一番大切なことである。すべての 子供が当事者意識をもって授業に参加できるような手立てを講じることが全員の学びを保 証することにつながるのではないかと考える。

② 教師の言葉を磨く

教師は言葉を操る職業である。教師の言葉が多いとノイズになる。逆に言葉が少な過ぎると 見通しがもてなくなってしまう。授業を他者に参観してもらったり(研究授業等),録画し たりすることで、メタ的に自身の授業を見る目を養う。そういった研鑽を行う中で、言葉を 磨くことが大切なスキルだと学んだ。 いま望まれる授業づくりとは ~ 個別最適×協働的な授業のデザイン~ 河村 裕晃(宮城県・大崎市立古川第四小学校・2017年度卒)

1. 実践の背景

「個別最適な学び」では、子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うことなどの「指導の個別化」と、教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供することで、子供自身の学習が最適となるよう調整する「学習の個別化」の2つを、児童が自己調整しながら学習できるように指導すること。また、探究的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する「協働的な学び」を充実すること。どちらも重要であると指摘。(文部科学省2022)

個別最適×協働的な授業のデザインを教師がしていくことは、急務の課題だと考える。

2. 実践の方法・内容 ~ 3 年音楽『とどけよう このゆめを』 $\sim (2/2)$

- ○本時の目標
- ・曲想の変化や、歌声とリコーダーの音の重なり合う響きを楽しむことができる。
- ○本時での個別最適×協働的な学びのデザイン
- ・8名の小グループで練習、発表をすることを説明する。(A,B,C,Dの4つ)
- ・グループの中で、歌とリコーダーのパートに分かれることを指示する。
- ・指導用 CD を録音した動画を配布する。(歌詞あり、歌詞なしのどちらも)
- ・教室でA,Cグループ、音楽室でB,Dが練習し、音が混ざりにくいようにする。
- ・指導用 CD を録音した動画を聴きながら練習する。そのとき、音の大きさのバランスを考え、パートの人数を増やしたり減らしたりすることを説明する。
- ・練習中、各グループの演奏を聴き、音の大きさのバランスについて助言する。

3. 考察

(1) 一人でも誰かと学べる環境を整える

本実践では、お手本となる動画を使って一人で演奏する児童、誰かと一緒に演奏する児童、 練習の仕方はそれぞれだった。児童に学び方の選択肢を提示し、それぞれが学びやすい環境 を整えることが、個別最適×協働的な学びには必要である。

(2) 支援するべきか見極める力

個別最適×協働的な学びの環境を整えると、教師の役目は児童への支援が主である。そのとき、支援が必要な児童、自分で成長できる児童がいる。教師は、支援するべきか見極める力を高め、児童のためにより良い行動を考えていく必要がある。

いま望まれる授業づくりとは~一斉授業と個別最適・協働的な授業~ 塚野 駿平(新潟県・新潟市立新潟小学校・2017 年度卒)

1. 実践の背景

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」(文部科学省・R3)によると、一斉授業か個別学習か「二項対立」の陥穽に陥らず、どちらの良さも適切に組み合わせて生かしていくとしている。実際に今日の教育現場では、一切の教育活動を一斉授業と個別最適化された授業のどちらかで行うことは困難である。具体的に述べると、まだ学習の基盤が形成されていない低学年の子どもが、より自由度の高い個別最適化された授業のみで学習を進めていくことは難しい。また、高学年であっても、国語や道徳の授業など、話合い活動が中心となるような学習内容は同様に難しい。逆に、学習活動の全てを一斉授業で行おうとすると、子どもの集中力が持続しなかったり学習の定着が図れなかったりする可能性がある。よって、現状の小学校教育においては、活動内容や学年、子どもたちの実態などに合わせて一斉授業と個別最適化された授業のどちらの形態も併用していく形が現実的だと考える。

2. 実践の方法・内容

- (1) 6年国語「やまなし」(一斉授業)
- *単元の最初に単元計画を配布し、単元の見通しをもたせる。
- *教材と出会った初発の感想で、本文を読んで疑問に思ったことを集める。
- *子どもたちから出された疑問を中心に学級全体で話し合い, 疑問に対して結論づけていく。
- (2) 6年算数「拡大図と縮図」(個別最適な授業)
- *単元の最初に単元計画を配布し、単元の見通しをもたせる。
- *自分の習熟具合とテストまでの残り時間を考え、自らの進度を決める。
- *授業の最初と最後は学級全体で確認事項などを行い、それ以外は一人・ペア・グループを選んで学習する。

3. 考察

一斉授業と個別最適・協働的な授業は「どちらか」と二項対立で語られるものではなく、「どちらも」と共存させることで主体的・対話的で深い学びの実現がなされていくものであると考える。授業者による働き掛けで学びが確かなものになる場合と児童自身が探究することで学びが深まる場合とどちらも起こりうるためである。それらを含めた授業デザインを構成していくことが私たちに求められることだと考える。

いま望まれる授業づくりとは~ICTが個別最適な学びと協働的な学びを促進させる~ 大内 秀平(シンガポール日本人学校小学部チャンギ校・2016年度卒)

1. 実践の背景

令和2年度よりGIGAスクール構想が進められている。「Global and Innovation Gateway for All」(すべての児童・生徒にグローバルで革新的な扉を)の略であり、ICTの活用により個別最適化された学びをすべての子どもたちに提供し、問題解決能力を身に付けるための環境を整備することが目的である。

GIGAスクール構想により、クラウドサービスを活用した様々な活動が可能となった。 しかし、1人1台端末が実現して3年が経過した現在でも、ICT活用が目的となっていたり、 アナログの代替としての活用に留まっていたりすることが多い。GIGAスクール構想の本 来の目的を果たし、これまで実現することが難しかった学びを創り出すことが求められて いる。

2. 実践の方法・内容

○課題解決型の授業づくりとICT活用(5年生社会科「米づくりのさかんな地域」) 日本の農業の課題を学び、米づくり農家を応援するための動画制作に取り組む。完成した動画は農家の人に送ることで、目的を明確に取り組むことができるようにする。

教師は授業構想をスライド(プレゼンテーションソフト)にまとめ、「デジタル板書」として子供に共有する。教師が話して知識を伝達するスライドではなく、子供が活動し創り上げるスライドである。子供はデジタル板書を見ながら、グループで動画制作に取り組む。進捗状況、構想、作成した動画などもデジタル板書に貼り付けていく。学習課題や教師の指示発問、学習資料、子供の考えや問い、成果物などの多岐にわたる学習内容が一元化さる。時間や場所にとらわれず自分のペースで学習を進めたり、振り返りをしたりすることが可能になる。

3. 考察

(1) 授業観の転換

単なるデジタル化やICT活用ではなく、授業の在り方や考え方の転換が大切である。「学習内容を教える」から、ICTを使って「学びをデザインする」(課題解決・目的達成のためにプロセスを設計する)ことが必要である。

(2) 学習者主体のICT活用

教師が ICT を使うことに留まらず、子供がどのように使うのかが大切である。学習者主体の ICT 活用を、実態を踏まえて考えていくことで、個別最適な学びと協働的な学びを促進させることができる。

いま望まれる授業づくりとは~授業づくりと教師~

髙橋 恵大(宮城県・仙台市立市名坂学校・2016年度卒)

1. 実践の背景

教員の研修については、教育公務員特例法に規定されているが、平成18年12月に改正された「教育基本法」にも盛り込まれたことで、教員の「研究と修養」の充実が、より一層求められている。(教職員研修の手引き2018独立行政法人教職員支援機構より引用)しかし現在、学校現場は様々な対応に追われ、多忙極まりない状況が続いている。研究と修養に割ける時間はほとんどない。そんな中で、校内では校内研究や悉皆研修などに取り組んでいる。校内で学ぶならば楽しく充実したものにしたいという願いから、私なりに主体的に取り組む方法を模索してきた。また、校内だけでなく、校外や自己内での学びも蓄積している。これらを踏まえ、いま望まれる授業づくりについて考えていきたい。

2. 実践の方法・内容

校内研修

- ・校内研究・・・研究テーマから、学年の先生と個別最適な学び・協働的な学びとはまず何かを話し合い、工夫して授業を考えている。実態を踏まえた研究が出来ている。
- ・同僚と意見交換・・・日々教室を自由に行き来する中で、授業のやり方、教材について質問し合う。日常的に学び合える環境を作れている。

校外研修

- ・勉強会への参加・・・大学時代から勉強会に参加している。知識が増えたことでアンテナの感度が上がり、様々なことに意識が向いている。学ぶスピードに変化が出る。
- ・水曜会・・・毎週水曜日に大学時代の友達6人で約一時間集まり、実践を発表し意見交換をしている。毎週実践を発表することで自分の強みが現れ始めている。

自己研修

- ・読書・・・ビジネス書なども読むことで、違う世界について知ることができる。教育書を読むときは、試していく中で自分に合うものを見つけることが重要だと考える。
- ・SNSなど・・・教育外のサブスクなどもコンテンツとして活用することが有効である。

3. 考察

- (1) 校内・校外での学び 校内で学んだことを校外でも学ぶことで情報のアップデートをすることができる。例えば、個別最適な学びや協働的な学びという言葉の意味や実践などについて。また、指導法などに関しても、全国な様々な先生の話を聞くことで影響を受けることがたくさんある。
- (2) 自分に合う授業スタイル 忙しい中でも持続可能な授業づくりを行うために、自分に合う授業のスタイルを早めに確立したい。校内や校外、自己内で学んだことの中から、自分の好きなことや実践して楽しいことを授業に組み入れ、自分流の授業方法を見つけたい。それをシステム化することで、いま望まれる授業づくりに近づけると考えている。

回答総数(47)

■現在の所属・職業:

大学4年生	3 9人
大学2年生	1人
東北福祉大学の卒業生	4 人
東北福祉大学以外の大学所属	1人
上記以外の学校関係者	2名

■話題提供・実践内容について:

とても有意義だった	28人
有意義だった	17人
あまり有意義ではなかった	2人

■話題提供者の実践内容に関するコメント

- *現場の実践をたくさん聞くことができとても勉強になりました。教員になってからもこの学ぶ姿勢を大切にし続けたいと思いました。
- *授業づくりについて沢山考えることができました。
- *どのご講話での実践も、自分が教壇にたった際に活用したい内容で、子供の 1 年間の中 にどう組み込むかを考える時間となりました。
- *自分たちをお互いに高めようとしている姿が印象的で私も学び続ける姿勢を大切にしていきたいと思いました。
- *全国または世界で活躍しているまたは日々勉強している若い先生方がいることに勇気づけられました。
- *教師を目指す学生のためこれからも実践を重ねて教師の楽しさを広げていただきたいです。
- *一斉授業をするか、個別最適で協働的な授業をするかという内容が印象に残りました。一 斉授業だと分かっている子どもの学びが深まらないということを聞いて、塾などで先に 学んでいたり、授業で新しい発見がなかったりした時に教師は何ができるとかといった ことを考えるきっかけになりました。また、DX実践という内容も興味深く、子どもたち が自ら TikTok のような動画やニュースを作っていたのが印象的でした。楽しみながら学 べる例を見ることができて良かったです。
- *若手教員が水曜会等、情報を共有し、仲間とともに学び続ける姿勢に心打たれました。ありがとうございました。

- *一斉授業、個別最適・協働的な学びのそれぞれの良さ、課題について知ることができました。それらを踏まえて授業に取り入れることが大切だと思いました。
- *同じような内容でしたが、勉強になりました。
- *5人の実践について、教師は児童を支援したり授業の司会者であったりとファシリテーターの役割が多いのだと思った。そしてこれが授業を学級作りに活かす方法であると考える。学級経営の軸は教師が決めるためにぶれてはならない。しかし、学級づくりは児童も含めた全員が関わるため、より柔軟な考えであるように思えたからだ。私はまだまだその力が備わっていないので学び続けていきたい。
- *一斉授業と個別最適な学び・協働的な学びのどちらを使うか、様々な分析をして実施する方法を見極めていきたいと思いました。
- *さまざまな分野から自分の知らない現職のお話を聞くことができ、とても刺激になりました。
- *話が早すぎてよく分からなかった。

■若干の考察

- (1)参加者人数は70名を超えていた。よびかけが不足していたのか、アンケートの回収 率が低かった。アンケートの記述時間を確保するとよかっただろう。
- (2) 例年90分ほどの発表時間に2人の話題提供者でやっていたが、今回は5人の話題提供者がチームとなって一つのテーマで発表するという挑戦を行った。話題提供者のサイドから意向であるが、参加者から一定の支持を得たようである。
- (3) 5人の話題提供者のうち2人がオンラインによる話題提供を実施した。大学サイドの テクニカル・サポートなどの負担はあるが、それによってシンガポールと新潟からの 話題提供を得ることができた。次年度以降のヒントになるだろう。

司会:伊藤くるみ、大沼耕己

参加者 卒業生:13名 在学生:48名 計 61 名



1. 渡邊航平先生(2019年度卒)渡邊先生は、4年目でロイロノートを活用した個別最適な学びへのアプローチについて取り上げた。一人1台ずつ持つ Chromebook を使い、算数科の解き方の共有や社会科のシンキングツールでの意見交流、集約した意見を視覚的に示す AI テキストマイニング、遊び心を取り入れ競い合うことで学習内容の定着を図る「Kahoot!」などのツールも紹介した。ICT 活用の強みと弱みの両面を考慮した上で効果的に活用していると語った。

<質疑の様子>

「これまでICT を活用した授業で、ICT を活用しない方がよかったと感じた授業はあったか。」という質問があった。渡邊先生は、特に国語と算数で数回あったと報告していた。クイズ形式でどのような教科でも活用することができる「Kahoot!」などで学習することがお楽しみ時間となり、学習を深めるという本質を見失ってしまうことが考えるため、活用する際には目的を明確にしながら、学習の記録としてノートを書くことと ICT の活用をバランスよく扱うことが大切であると話していた。



2. 武田拓真先生 (2018 年度卒) は、教員になって 4 年が経過し、「第 6 学年社会科の歴史単元の授業展開から」というテーマでお話していただいた。武田先生は、教員 1 年目からよりよい社会科の授業づくりについて考え、現在では 3 つの視点 (問いの構成・補助資料の活用・振り返り) を軸に授業づくりをすることで、ゴールイメージをもち、授業づくりができるようになったことを教えてくださった。

<質疑の様子>

まず、「武田先生は、ペアではなく、3人グループでの話し合いを重要視しているそうですが、ペアではなくどうして3人なのですか」という質問があった。武田先生は、「ペアだとどうしても行き詰ってしまうことがあるが、3人だと3人寄れば文殊の知恵ということわざがあるように意見がたくさん出るし、何より1人は司会、1人はノートをまとめる、1人は発表する人と役割分担をすることもできる」と話した。次に、「ICT とノートの使い分けはどうしているか」という質問があった。「細かい部分まで目を通して欲しいという思いから資料を見る時はタブレット端末を使用する。一方、手で書いた方が早い場合、また、自分の考えを書いたり、授業を通して何ができるようになったのか(振り返り)を書いたりする場合にはノートを使用する」と話した。

<感想>

学校現場では、ICT を最大限活用した学習方法、児童の学習の実態に合わせた最適な学びを行う授業づくりが行われていることを改めて実感した。児童一人ひとりが各授業の間で思考し続け、より深い学習を行うことが出来るような授業を作る教師を目指したい。 (3年 後藤 翼斗・藤田 龍太郎)

第2分科会(小学B) 講演要旨

司会:伊藤くるみ 大沼耕己

『学習指導要領全文を読む:「キャリア・パスポート」の展開』

講師 : 本学教育学部教授 長田 徹先生(元公立中学校教諭、仙台市教育委員会指導主事)



ご講演いただいた長田徹先生は、宮城県や仙台市の公立中学校教諭、仙台市教育委員会指導主事として生徒の学力向上、キャリア教育に尽力を続けてこられた。 TFU 教育フォーラムでは現代社会の背景や状況を踏まえ、学習指導要領全文:「個別的な学び」と「協同的な学び」についてキャリアパスポートの重要性について講演をいただいた。

<講演の様子>

講演は賑やか雰囲気で行われた。最初に参加者2~3人ほどでチームを作り、じゃんけんで 勝った順番からA、B、Cとなった。講演中の活動では「入学式でテストの順位が出ると聞 いて不安になりました。| といった質問が出題される。A はこれを読むだけで、B.C がその 質問について回答する。学生だけでなく先生方も参加し、盛り上がりを見せた。その後、学 習指導要領の前文について言及した。前文には、教育基本法の精神に基づき、「一人一人の 児童生徒が、自分のよさや可能性を認識する | ことが重要であり、個別最適な学びと協働的 な学びの一体的な充実が求められている。学びの意義を実感し、つながりを感じることが改 訂の目的であるといった説明を受けた。なぜそういった改正が必要であったのかは現代社 会の背景にあった。国立教育政策研究所等の調査では、中学生と高校生が将来や進路につい て不安を感じていることが分かった。また、日本の若者の自己肯定感や社会参画意識が低く、 自分を「価値のある人間」と評価しない割合が高いことが指摘された。日本の児童生徒は数 学や理科の学習が日常生活や職業に役立つことに関心が薄く、国際平均を下回っている。学 びが生活や社会につながらず、学習意欲の向上が大きな課題となっている。国際的な学力調 査や調査結果を検証し、個別最適な学びと協働的な学びの充実について考える。さらに、全 国の学校の事例から学びのつながりを実感し、学習者の主体性や可能性を引き出す評価に ついて再考する機会となった。また、キャリア・パスポートの展開も含めた学びのつながり にも注目できた。

<感想>

「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」について考える機会を通じて、今後の学校教育には学習者の主体性や可能性を引き出す評価が重要だと感じた。特に、若者の自己肯定感や社会参画意識の低さを示す調査結果には驚いた。学びが生活や社会とつながり、実感を持てるような教育が求められ、それによって学習意欲の向上や将来への不安を軽減できるのではないかと感じた。 (3年 岡崎 佑也)

第2分科会(小学B) アンケート結果

回答者数および基本属性(現在の所属・職業)

60件の回答があった。そのうち所属・職業は、以下の表のとおりで、本学学生が41人・68.3% (うち4年生が36人・60%)、本学卒業生が6人・10%、上記以外の学校関係者が12人・20% (うち他県高校教員が2人・3.3%)、その他が1人(出版社で教材制作)となっている。

本学学生	41 (68.3%)
本学卒業生	6 (10.0%)
上記以外の学校関係者	12 (20.0%)
その他	1 (1.7%)
合 計	60 (100%)

第一部講話について

「とても有意義だった」と回答した人が52人・86.7%、「有意義だった」が8人・13.3%となっており、とても有意義と感じている参加者が90%近くと大変多くなっている。

また自由記述は半数以上の33件の回答があった。その中で、「キャリア・パスポートの有用性がとてもよくわかりました」「キャリア・パスポートの意義を再確認させていただきました」など、キャリア・パスポートの重要性に言及した回答が8件あったことが注目される。

さらに、「自分の良さや可能性に気づくことができるようにすることの大切さを感じました」「児童に学ぶことの意義を実感させることや児童理解を深めることがとても大切だということを講義を通して学ぶことができました」など、子ども自身に自分の良さや学ぶ意義などを気づかせることの大切さをあげた回答も特徴的といえる。

卒業生の話題提供・実践発表の内容について

「とても有意義だった」と回答したのが36人・60.0%、「有意義だった」が23人・38.3%となっている。1人は参加していなかった。とても有意義と回答した人が60%ではあるが、参加した全員が有意義だったと感じている。

また自由記述はほぼ半数の 29 件の回答があった。ここでは、「ICT の効果的な使い方を 学ぶことができ、大変参考になりました」「ICT の活用場面を具体的にわかりやすく教えて いただき、私も来年からやってみたいと思う」など、ICT の活用に関する記述が 13 件と多 かった。従来の方法と ICT 活用について、それぞれの良さを学べたことが分かる。

さらに教材研究の重要性の再確認にもつながったことを示す回答もあった。

なお、「それぞれしっかりとした問題意識を持った実践的な発表で興味深かったのですが、 時間の都合とはいえ一つ一つの発表が短かったのが残念でした」という指摘もあり、次回以 降の検討すべき点も示されていた。

今回のフォーラムについて(役に立つ実践的な内容となっていたか)

「とても役に立つ実践的な内容だった」と回答した人が55人・91.7%、「役に立つ実践的な内容だった」が5人・8.3%だった。ここでも全員が役に立つ実践的内容だったと感じている。

また自由記述では24件の回答があった。「非常に学びの多い時間になりました」「来年からの教員生活に生かしていきたい」など、積極的な評価が目立つ。特に在学生にとってはこれからの実践に大変参考になったことが示されている。

さらには「実際の子どもたちの姿を通して学ぶことができたので、とても有意義な時間になりました」という回答に代表されるように具体的な実践の手がかりを多くの参加者が得られたことがわかる。そして「来年もまた参加したい」と明記してくれた参加者も二人いた。

全体として高評価をいただいたということができる。

第3分科会(中等社会)

司会:熊谷 里菜

参加者:一般(卒業生含)4名 在学生77名 本学教員4名 計85名



1. 秋本弘章先生(獨協大学経済学部教授)は、学習指導要領の改訂による学力観の転換を踏まえ、地理教育における深い学びについて「つながり」という視点からご講演くださった。「Tシャツ」と「カップ麺」を教材例とした説明は具体的でわかりやすく、地理の教材化のきっかけは日常生活の至るところに転がっていることを指摘された。講演終了後、入試に向けて

の指導で教科書を網羅する必要はあるのかという参加者からの質問に対し、近年の入試問題は応用問題が多い傾向にあるため、教科書を終えることに腐心するよりもむしろ指導の中に主要な概念を含めることに重点を置いた方がよいとのご助言があった。



2. 平間琢也先生(平成30年度卒)は現在、名取市立第一中学校に勤務されている。「Think-pair-share(考える、話し合う、共有する)」を意識した授業づくりにおいて生じる諸問題をICTの活用によって改善し、個別最適な学びと協働的な学びを共に実現できることを報告された。報告終了後、ICTの使用にともなう集中力低下への対応策を尋ねる質問に対し、机間指導や個

別アプローチの実施が重要であると述べられた。また、発表者以外の評価方法に関する質問に対しては、活動の最後に行う個人ごとのまとめを評価の対象にしていると回答された。



3. 伊藤梨乃先生(平成30年度卒)は、現在、仙台育英学園高等学校に勤務しておられ、国際バカロレア教育(IB)での実践例を報告された。地理総合において主体的な学習を促すアクティビティとして設定している「新製品の企画」を実施したが、各地の特性を背景としたカップ麺を企画するプログラムで、個別最適な学びと協働的な学びを繰り返すことによって主体的、

対話的で深い学びにつながったことを実感されたという。また、グループ活動や話すことが 苦手な生徒に対して一つ一つ丁寧な指導を心がけることが大事であると述べられた。

[感想] 秋本先生からは、身近な日常の中にあるきっかけを教材にして「生徒の生活」と「世界」や「今」とをつなげていく視点をもつことをご教示いただいた。また、平間先生と伊藤先生からは教育現場でのご経験をもとに、個別最適な学びと協働的な学びの実践について学ぶ機会を得た。 (3年 阿部 和生・佐藤 里衣・佐野 雄大)

第3分科会 講演要旨

現代の学力観と地理での学びを考える-「T・シャツ」と「カップめん」の教材化-秋本 弘章 (獨協大学経済学部 教授)

新しい学習指導要領での教育は、中学校では 2021 年度から全面、高校では 2022 年度から年次進行で実施されている。この学習指導要領では、コンピテンシー重視、すなわち「何を知っているか」から「何ができるようになるか」といった学力観の転換が示されている。同時に、これを実現するために学び方の転換、すなわち主体的・対話的で深い学び(アクティブ・ラーニング)を求めている。では、教育現場では具体的にはどのような「学び」を構築していったらよいのであろうか。

もともと、地理などの社会系教科の目標は「公民的資質」の育成にある。公民的資質の育成は、単なる知識や技能の習得では達成できるものではない。したがって過去の学習指導要領においても、作業的学習の意義を重視し実施するように求めてきた。作業的学習こそ主体的・対話的で深い学びであり、今回のテーマである「個別・最適学習」と「協同学習」の具体例ともいえる。一方で、目標と内容との関連性が明確でなかったこともあって、講義を中心とした学習が主流となっていた。この状況の改善を促すため、今回の学習指導要領においては、目標と内容を関連させて示している。

主体的・対話的で深い学びを実現するために、私は、いくつかの教材(アクティビティ)を提案してきた。そのうち、「T シャツ」と「カップめん」を取り上げた教材について、検討する。

「T・シャツ」は、生徒にとって身近な素材である。学校でもクラスや部活動でオリジナルデザインの T・シャツを作ることがあるかもしれない。ところで、T・シャツそのものはどこで生産されているのだろうか。「中国製」が多いが、最近は「バングラデシュ製」なども見かける。さらに、T・シャツの原料となる布やさらにその原料の綿花はどこで生産されているのであろうか。原料の生産から私たちが着用するまでの過程を追うことでグローバル化した社会のありようを考察させる。この学習では、表面的な流れを追うだけでなく、それぞれの国や地域で様々な課題に気づかせることが肝要である。この課題の考察は、個別化した学習となるが、それを共有することで学習は深まるだろう。

「カップめん」も生徒にとって身近な存在である。この「カップめん」の商品企画を考えるという教材である。現在販売されているカップ麺の特徴や世界の食文化を調べたうえで、世界のいわば「ご当地めん」を考えてみようというものである。この学習のポイントは、「調べる」という活動を含むことで、基礎的な地理知識を補うことができるというところにある。つまり、いわゆる「学力差」を超えて学習が可能なのである。その意味で「個別最適化」した学習となりうる。また、それらを相互に報告しあうことは「協同的」な学習でとなる。また、こうした学習過程の中で、教員が知識や技能の確認を行うことで「知識・技能」の習得にも対応することができよう。

作業的学習の利点と欠点についてはこれまでもさまざまな議論がある。しかし、知識や技能の定着という側面を見ると、一般の講義型学習より効果が高いといわれている。今後もさらなる教材開発と実践を進めていくべきであると考える。

中学校社会科地理的分野における個別最適な学びと協働的な学び ~Think-Pair-Share×ICT を通して

平間琢也(宮城県名取市立第一中学校 教諭・平成30年度卒)

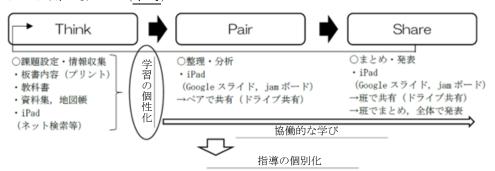
1. 実践の背景

本実践は、地理的分野の単元「世界の様々な地域(アジア州)」である。「令和の日本型学校教育」が中央教育審議会より出され、中学校社会科の授業で個別最適な学び(以下、「①学習の個性化」「②指導の個別化」に分けて考える)と「③協働的な学び」の実現を考えると、30~40人の生徒に対し、教師一人がその学びをどこまで支えられるのかという点が授業者の課題であった。「①学習の個性化」や「③協働的な学び」はこれまで同様「課題の設定」→「情報収集(①)」→「整理・分析(①③)」→「まとめ・発表(③)」というフローで学びを支えることができる。重要な点は、「②指導の個別化」である。本実践の地理教育は数学や英語と異なり「基礎→応用」という段階的な流れが生徒にとって分かりづらい分野である。そこで「Think-Pair-Share×ICT」の実践を通して「①学習の個性化」を充実させることで、「②指導の個別化」を支えたいと考えた。

2. 実践の方法

単元名:「世界の諸地域(アジア州)」6時間扱い

- ① アジア州をながめて
 - ② アジア NIES の成長,巨大な人口が支える中国
- ③ 都市化が進む東南アジア ④ 急速に成長する南アジア、資源が豊富な西アジア
- ⑤⑥ アジア州のまとめ(本時)



3. 考察

- (1) 大会・分科会のテーマについて 課題設定や情報収集の段階で「①学習の個性化」をすることで、生徒個人が目標に沿って、自分で調べやすい内容、つまり自ら「②指導の個別化」を図ることができると感じた。
- (2) Think-Pair-Share×ICT について Google スライドや jam ボードを活用することで, 瞬時にペアや各班, 全体に Share することができることがわかった。また, 効果的に協働的な学びを授業に取り入れることができると感じた。
- (3) 今後の取り組み Pair や Share を苦手とする生徒もいたため、その生徒に対しどのようなアプローチをとっていくか課題である。また、今後は教育現場の ICT 活用指導力の向上に向け、Google スライドや jam ボードを活用した実践を校内外で積極的に発表していきたい。

少人数学級における「地理総合」〜国際バカロレア教育 (IB) をとおして〜 伊藤 梨乃 (私立仙台育英学園高等学校 情報科学コース教諭・平成 30 年度卒)

1. 実践の背景

仙台育英学園高等学校 秀光コースは、1 学級あたり 15 名~20 名程度の人数で、国際バカロレア教育((IB: International Baccalaureate)に取り組み、「Language, Music & Science」を教育の軸に、国際社会で活躍するグローバリストを育てることを目標としている。国際バカロレア教育は「多様な文化の理解と尊重の精神を通じて、より良い、より平和な世界を築くことに貢献する、探究心、知識、思いやりに富んだ若者の育成」(文部科学省 HP「IB の使命」より)を使命としている。

本校では、1年次に「地理総合」が必履修科目となっているが、2年次以降は IB の教育プログラムに合わせて History を履修するため、地理に触れるのは 1年次のみとなっている。こうした状況の中で「人はどのような方法を用いて知識を獲得するのか」を念頭に、「地理総合」における産業の発展と生活文化の単元において、生徒自身がクラスメイトに授業をする実践を行った。

2. 実践の方法・内容

(1) 個別最適な学びを実現するために

内部進学組と外部選抜試験組との学力差が著しく、地理的な知識量も個人差があった。しかし、一人一台 PC を所有しているため PowerPoint や Google が提供している Jam board を活用しながら自らの課題を探究した。その過程で、自然と新たな疑問が生まれたり、他者の発表への指摘が起こったりして、協働的な学びへとつながった。

(2) 協働的な学びを実現するために

中学校入学時から協働的な学習に触れてきた生徒たちであったため、クラスメイトと協働して課題を探究、解決することには慣れていた。「どのように伝えれば相手は地理的事象を理解するのか」を考えさせ、クラスメイトの学習定着率の向上を図った。

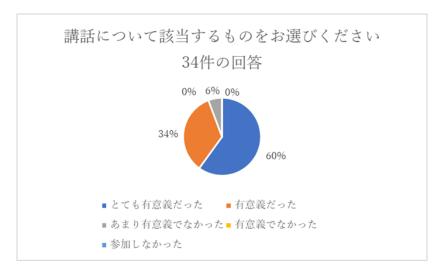
3. 考察

本フォーラムの全体テーマ「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るには?」を踏まえ実践を行っていく中で、「個別最適な学びは実現できるのか」という不安や「どのように授業展開を行えば協働的な学びへとつながるのか」という疑問はあった。

しかし、グループでの活動を通していくなかで、生徒個人が「今、何を考えるべきか。どのようにして相手に伝えるべきか」という思考を読み取ることができた。ICT の発達もあり、個人レベルで解決できることも増え、グループでの活動に幅が広がった。「個別最適な学び」と「協働的な学び」は一見相反した学習に見えなくもないが、実際は相互関係にあるということを実感できた。生徒たちが主体的になればなるほど学級全体によりよい学習効果がうまれ、高いレベルでの学習定着が見込めると考えられる。

第3分科会 アンケート結果

1 講話について (34件の回答)



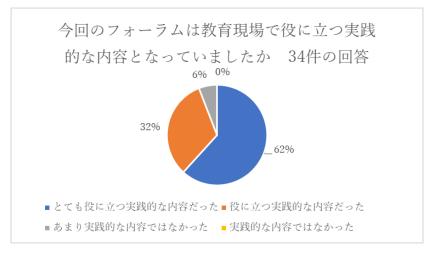
〈ご意見〉

- ・資料の表面的な読み取りだけではなく、社会背景まで読み込むことが印象的であった。
- ・「深い学びとはなんなのだ?」という疑問をもっていた私に、「事実の背後にある原理を考える」というひとつの答えを提示してくださったのはとてもありがたかった。
- ・地理では統計資料など知識の保持ができないため、常に学び続けることが必要であること を改めてご講話から感じた。
- ・個々の最適な学びを軸に、地理教育でも T シャツやカップ麺など身近な生活用品に触れて 1 つの資料・データを世界の流れと結び付けて世界像を捉えていくという内容はとても勉強になりました。また、学習指導要領の改訂においても大学受験のための勉強だという意識が強い高等学校では地理教育への関心が薄く、必修化される前は履修者が少なかったこと、グローバル化が見られる現在において地理教育がいかに重要な役割を果たしているかを考えさせられました。
- 2 卒業生の話題提供・実践発表は有意義だったか(34件の回答)



〈ご意見〉

- ・生徒のためになる授業をするために、そのきっかけを与え、生徒が少しでも背伸びをして 学習できるように指導したいと思った。
- ・平間先生のご報告からは、ICTを活用した学習の個性化、協働的な学び、指導の個別化について、また「Think-Pair-Share」との関係についてもよく理解することができた。その際の詳しい方法も Google ドライブを活用して見ながら理解できたので、これからにとても活かせる内容だと思った。伊藤先生のご報告では、国際バカロレア教育(IB)について全く知らなかったため、新しい知識を知れて良かった。少人数の授業でできることを最大限に活かして個別最適な学びに繋げられていると感じた。
- 3 教育現場で役立つ実践的な内容だったか(34件の回答)



〈ご意見〉

- ・今回は対面ではなくオンラインで参加させていただきましたが、円滑な進行や万全なネットワーク環境が整っていたので、安心して話を聞くことができました。次回も参加したいと思うほど有意義な時間を過ごすことができました。ありがとうございました。
- ・警備の都合もあるのかもしれませんが、西門を使えるとより開かれた場になっていいのではないかと感じました。正門までと正門から講義棟までの道にアップダウンがあり、アクセスがあまりよくないと思います。
- ・質問のハードルがだいぶ高いため、発表者と参加者が直接やり取りできるツールがあると いいなと感じた。

司会:小笠原 由馬、 鎌本 圭史郎

参加者 一般:5名 在校生:21名 本学教員4名 計30名



1. 宮城教育大学教育学部教授の市瀬智紀先生から「地域の多文化共生の進展と外国にルーツを持つ児童生徒の教育ーインクルーシブな学級の実現をめざして一」と題してご講演いただいた。外国人児童生徒の受け入れに関する教育課題や多文化共生教育に関する実践的な取組について、ワークショップ方式をとり入れながらお話しされた。ご講演の最後には、多文化共生社会の実現に向け、教師としての成長・求められる力ついてご教示いただいた。

質疑の様子

質疑応答では次々と活発な質問がなされ、宗教上の理由によって学校行事に不参加となった事例や学納金未納や貧困のため退学となった事例等について市瀬先生の貴重なご意見を聞くことができた。

*市瀬先生の講演会の様子については、次頁で詳しく報告を行った。



2. 東北福祉大学教育学部教育学科初等教育専攻 4 年生の大平智也さんから「オーストラリア ケアンズにおけるインクルーシブ教育を視察して」と題してご発表いただいた。留学に参加して得た経験を基に、日本とオーストラリアの特別支援をめぐる教育システムの違いについてお話しされた。

質疑の様子

質疑応答では、障がい児に関する指導体制や設備・環境に関する質問の他に、「先住民族アボリジニの児童に対してどのような配慮があったのか」、「いじめは実際に見聞きしたか」という質問がなされた。それに対して、「特別な配慮はしていないが、アボリジニの文化などを学習する機会を設けて理解を深めようとしていた」、「障がい児も一緒にドッジボールをし、みんな仲が良かった」と回答された。

感想

市瀬先生のご講演では、教育現場の多文化共生について普段の授業では聞くことができない貴重なお話を聞くことができた。また、ご提示いただいた多文化共生のアンケート調査結果から、外国人の方々の様々な意見を知ることができ、大変学ぶことが多かった。大平さんのご発表では、ケアンズ留学での実体験を通じてオーストラリアのインクルーシブ教育と日本の特別支援教育との比較を考察されていたが、日本でインクルーシブ教育システムの構築を目指すための課題について、大平さんと共に考えを深めることができるとても良い機会となった。 (2年 千葉 慎一朗・中村 元・吉田 開)

演題:「地域の多文化共生の進展と外国にルーツを持つ児童生徒の教育 ーインクルーシブな学級の実現を目指して一|

宮城教育大学教育学部 教授 市瀬智紀



ご講演いただいた市瀬智紀先生は、国立大学法人宮城教育大学教育学部で国際教育領域をご担当され、主に国際理解教育や多文化教育について研究を続けてこられた。ご講演では、現在、仙台市の外国人住民数が過去最多の約14,540人になっている事実を念頭に、教育現場での多文化共生の促進と外国人児童生徒のための教育的取組の展開についてお話いただき、インクルーシブかつ多文化共生を促す学級の実現が必須の課題の一つであり、それに向けての様々な課題についてご講話いただいた。

質疑の様子

質疑応答では、外国人児童生徒のための教育的な取組についての質問が多かった。主な質疑応答は、以下の通りであった。

アメリカから来たクリスチャンの小学生が学校行事で行われる七夕の行事に参加しようとしない事例、さらには、インドネシアから来たイスラム教徒の小学生が信仰上の理由で食べ物に制限がある事例に対して、どう対策すべきか意見が求められた際、「家庭の事情や背景にある文化・宗教・習慣などを把握し、親とその課題についてしっかりと吟味することが大切である」と回答された。また、小学校における問題に加えて、「学校納入金が払えない」、「英語教員が英語で話しかけてもどこまで話が通じているのかが分からない」といった中学校・高校に関連した問題についても話し合われ、「進学情報や奨学金情報などが十分に伝わっていない」、「フィリピン出身の家族は英語ができるはずという思い込みがある」という点が指摘され、「生徒1人1人の問題にしっかり向き合って一緒に考えていくべきである」とお答えになった。

次々と活発に質疑応答が行われ、市瀬先生より多文化共生のあり方やインクルーシブな学級の実現についての具体的な方策を伺うことができた。

感想

市瀬先生のご講演では、多文化共生の進展のためにインクルーシブな学級をどう実現していくかについて学び、普段英語科で行われている異文化理解の授業活動と結びつくことで、多文化に対する理解がより一層深まった。また、市瀬先生のお話の中で、「外国人を『サポート(支援)する』という姿勢ではなく、『外国人の方々から我々も学ばせてもらう』『同じ目的に向かって互いに協力する』という対等の姿勢が大事」という意識改革の話があり、自分たちがこれから教師を目指す上で大変貴重なメッセージをいただいた。今後こうした問題についてしっかり考えながら、教師として求められる力を身につけ、その職務を全うしていきたい。

(2年 千葉 慎一朗・中村 元・吉田 開)

地域の多文化共生の進展と外国にルーツを持つ児童生徒の教育 インクルーシブな学級の実現をめざして

市瀬 智紀(宮城教育大学教育学部 教授)

1. 多文化共生社会の進展と外国人児童生徒の学習背景

多文化共生社会の現状について、仙台市の状況をみると、コロナ禍で外国人住民の総数は一時的に減少したものの、14,540人(令和5年4月30日現在)と過去最多になっています。国内外の情勢からすれば、日本における外国人住民との共生と学校における外国人児童生徒等受け入れに関する教育課題は、教員になるみなさんにとって、今後必須の教育的トピックになってくると思います。

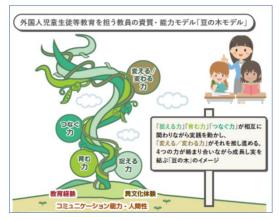
宮城県は、全国に先駆けて2007年に「多文化共生社会の形成の推進に関する条例」(7月11日施行)を制定した自治体です。そこでは「国籍、民族等の違いにかかわらず県民の人権の尊重及び社会参画が図られる地域社会の形成を促進し、もって豊かで活力ある社会の実現に寄与することを目的とする」と示されています。「多文化共生社会の形成の推進」とあるように、この条例は「多文化共生社会」が形成途上にあり、実現していると認識しておりません。歴史的に移民を受け入れてきた欧米先進諸国でも、移民の受け入れに関して課題が山積しており、世界中のどこでも、多文化共生が「実現」して「成功」したといえる地域はどこにもないといえるでしょう。

さて、みなさんが学校時代を過ごした学級には「外国につながるクラスメート」はいましたか?そして それらのクラスメートとお話したことはありますか?わたしは、将来多文化共生社会の成否を担う鍵は、 学校そして教室(学級)にあると考えています。外国人児童生徒は、言語文化の習得プロセスや、アイデ ンティティの形成などにおいて日本人児童生徒と異なる背景を抱えています。外国人児童生徒が、学校 や教室において教員やクラスメートから疎外や排除をされることなく安心して通学できることが、将来 日本のコミュニティに参画できるかどうかを決定する重要な要素となります。

2. 外国人児童生徒のための教育的な取組の展開

さて、外国人児童生徒教育の分野では、学校に入ってきたばかりの児童生徒の初期指導項目が示され (1992 年)、教科との連接 (2003 年) についての検討や、アセスメントの開発 (2012 年) などが行われ

てきました。2014年には小中学校における「特別の教育課程」としての編成・実施が制度化され、本年度からは、高校でも「特別の教育課程」としての編成・実施が可能になりました。また、公益社団法人日本語教育学会は、2019年に「外国人児童生徒教育を担う教員の資質・能力モデル」を作成しました。そこでは、教員自身が「変える/変わる力」(Transformative Competency)を身に着けるべきであるとして、「社会正義と公正性を意識し、多文化共生を具現化することができる」「外国人児童生徒教育を自己の成長につなげることができる」ことを示しています。



3. インクルーシブな学級の実現をめざして

教員環境の国際比較 (TALIS 2018) によれば、多文化的な学級の指導が「かなりできている」「非常に良くできている」と感じている日本の中学校教員の割合は、OECD 諸国 34 か国の中で最低ランクになっているなど、日本におけるインクルーシブで多文化的な学級の実現はまだまだの状態です。本講義では、学級の日本人児童生徒に向けた多文化共生教育の実践についてもご紹介したいと思います。

発表主題「オーストラリア ケアンズにおけるインクルーシブ教育を視察して」 副題 ~日本とオーストラリアの教育システムの比較と今後の日本の課題の考察~

大平 智也(東北福祉大学 教育学部教育学科初等教育専攻4年生)

1. 留学・インターンシップに参加した背景

「海外の学校教育、福祉を見てみたい」「英語の語学力を向上させたい」という思いからオーストラリア クイーンズランド州 ケアンズで語学留学及び小学校・障がい者施設インターンシップに参加した。2022年9月に国連の障害者権利委員会から日本政府に対して障がい児を分離した特別支援教育の中止を求める勧告が発表された。一方で、海外ではインクルーシブ教育への移行が進み実践されていることを知り、実際にどのような教育が行われているのか強い関心があった。クイーンズランド州では1990年代からインクルーシブ教育が実践されている。視察して学んだことと日本の特別支援教育を比較し、これから日本がインクルーシブ教育システムを構築していく上での課題について考察する。

2. クイーンズランド州の小学校における教育システム

2023年3月8日に小学校を1日視察し、小学1年生の英語の個別指導、小学校5.6年生の英語・体育の授業に参加した。2クラス一緒になった広い教室、常にマイクを付けている教師、いろいろな種類の机や椅子が置かれている教室、大きな教室の中に小さな教室がある、日本と違う時間割等、日本とはかなり異なる点があり多くの発見があった。発表では写真を交えながら実際の取り組みの様子を紹介する。

3. 考察

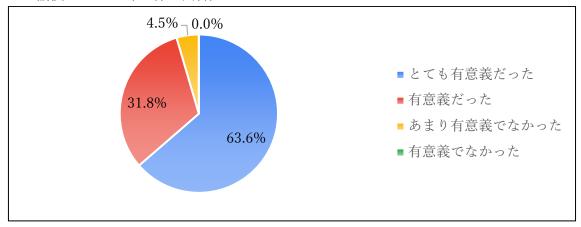
日本とオーストラリアの教育システムの違いは何か、また、日本でインクルーシブ教育システムを 構築するためにはどうしたらいいのか、何が課題なのかを考察する。

- (1)「世界に目を向ければ違いがいっぱい~個に合わせた指導とインクルーシブ教育~」 本視察を通して、日本では見られない学校の様子が多々あることを間近に見てきた。クイーンズラン ド州でのインクルーシブ教育を視察して、オーストラリアでは「個に応じた支援」と児童が主体的に 共同的に学べる教育システムとその環境があった。海外に出ることで視野が大きく広がった。
- (2)「これからの私たちには何ができるか?~オーストリアの実践から~」

「個別最適な学び」「インクルーシブ教育」は日本でも移行すべきとされているが移行できていないのが現状である。共生社会を目指すために学校職員配置の見直し、教員の専門性の向上に取り組むのはもちろん、環境の再構築ともっと自由で型にはまらない学校教育の考え方も大切にすべきではないかと考える。

第4分科会 アンケート結果

1 講演について (22件の回答)



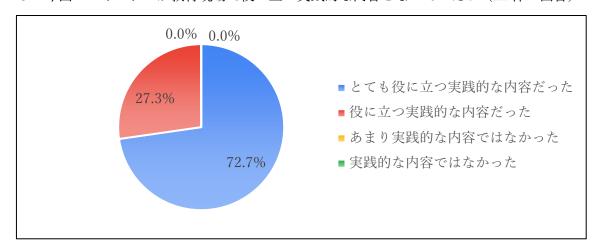
〈ご意見〉

- ・ディスクレシアなどのLDと、外国人児童生徒の困難は特徴が似ているという部分が特に 興味深く感じました。今回の講話に参加していなければ、特別支援しか学んでいない私は LDに向けた支援をしてしまっていたと思います。異文化理解について関心を持つきっかけ を作ってくださった先生に、心から感謝申し上げます。この度は、様々なことをご教授いた だきありがとうございました。
- ・多文化、多様性を受け入れる体制が日本は世界と比べてまだまだ充実できてないという現実を痛感しました。今後、今以上に多文化多様性を受容する体制、理解する姿勢が求められてくるので、自分が教員になった頃に活かせるようになりたいと思いました。
- ・日本人生徒だけでなく、外国人生徒に対するアプローチも真剣に考えていかないといけないと思わされた。「日本で教員をやるのだから、日本人生徒をメインに考えれば良いや」という考えはこれからの時代では通用しなくなるのだと感じた。

2 話題提供・実践発表は有意義だったか(22件の回答)



- ・障害がある児童・生徒が増加している中、今以上に特別支援を充実させることや障害に対する理解が求められてる中、特別支援教育が充実しているオーストラリアでさまざまなことを見て体感してこられたんだなと感じました。今後教員を目指す上で活かせることがたくさんあり、とても勉強になりました。
- ・とても勉強になりました。オーストラリアでの実体験を聞き、自分が教員になった際も活かせるところはどこだろうと考える機会になりました。
- ・オーストラリアの学校について知り、日本と外国の学校では大きく差があるのだと知った。自分の裁量でできる範囲で、外国の教育システムも取り入れられたら良いなと感じた。
- ・日本の教育、オーストラリアの教育どちらにもメリットやデメリットがあると思うので、 たくさんの意見を取り入れながら課題を補ってみんなが学びやすい教育現場になっていっ たら良いと思う。
- 3 今回のフォーラムが教育現場で役に立つ実践的な内容となっていたか(22件の回答)



- ・自分が普段聞けないような話を聞くことができ、有意義な時間でした。
- ・とてもいい学びになりました。インクルーシブ教育について色々考えさせられました。
- ・異文化理解について、自身も難しい課題だと感じていましたが、今回のフォーラムを通して、教育者としての見方や考え方のヒントを掴めたような気がしました。貴重な機会となりました。
- ・全体を通して教員になるために必要なことを多く聞くことでき良かったです。
- ・私は初等教育の学生ですが、普段学ばない知見を得られてとても有意義な時間を過ごせたなと感じました。
- ・いい意味で無駄のない発表で楽しかったです。基礎基本を踏まえながら聞けてよかったで す。
- ・時間を厳守しつつも柔軟な時間配分で、深い内容を理解することが出来た。

第5分科会 記録

第5分科会(特別支援)

司会:阿部笑弥、岩佐菜保子

個別最適な学びと協働的学びの一体的な充実を目指して ~カリキュラム・マネジメントのすすめ~

鳩原 潤(東北福祉大学教育学部教育学科准教授)



ご講演いただいた鳩原潤先生は、大学卒業後初任の小学校で3年間勤務された後、聴覚支援学校(当時で言う聾学校)教員としての経験を経て特別支援教育という存在に出会った。本講演では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の基礎やカリキュラム・マネジメントに関する内容を中心に学生に向けて語った。

1.「個別最適な学び」と「協働的な学び」 鳩原先生はこの個別最適な学びと協働的な学びについて考えていく上で、個別最適を個別"快適"として、また協働的な学びは幅広く捉えていくことが大切であると考えている。個別最適な学びに関しては、指導の個別化や学習の個性化など特別支援教育を行っていく上で必要な指導体制に加え、「その指導によって子供は楽しく学習できているのか」「教師の負担は重くないか」というところに重点を置いた「快適さ」を求める教育を実現することの重要性を強調した。協働的な学びに関しては、個別最適な学びが「孤立した学び」にならないよう探究的学習や体験活動を多様な他者と協働して行うことで、一人一人のよい点や異なる考えの組み合わさった、よりよい学び、限定的ではない幅広い学びを実現することの大切さを指摘した。この二つの学びを「令和の日本型教育」の実現に向けた課題とし、それぞれの学びを一体的に充実させ、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善につなげることが現代の教育には必要であるということを我々学生に向けて語った。

2. カリキュラム・マネジメントのすすめ 「カリキュラム・マネジメントをなぜすすめるのか。」という問いに対し、個別の指導計画の PDCA と教育課程の PDCA が連動するシステムを学校全体で構築し、それにより、「個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実」につなげ、子ども達の可能性を引き出すことができるからだと語っていた。また、それらにつなげていくために必要なのは特別支援学校での中核とも言える「自立活動」であり、そのため、しっかりと「自立活動」について学んでいく必要があると語った。

感想 今回の講演を通して、特に個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させていくことが、今後の日本型教育を築き上げていくうえで非常に重要なことであるということが分かった。本講演で学んだことをこれからの授業づくりや特別支援教育を考えていくうえで生かしていきたいと思う。 (3 年 佐藤 駿太朗・村井 りお)

司会:阿部 笑弥 岩佐菜保子

参加者 計 99 名



土屋晃希先生(2021年度卒)土屋先生は、2年目で特別支援学級での指導経験を踏まえ、特別支援学級における個別最適な学びと協同的な学びの実現について紹介した。ティーム・ティーチングについて、支援を五つの型に分類し説明した。その上で、授業全体の目標と個別の目標を達成するためには、TT間で両方の目標を共有する大切さを指摘した。また、協働的な学びの実現においては、良好な人間関係を教師と児童、TT間で形成することで、安心出来る環境を

作ることが出来ると説明をした。

質疑の様子

「全体支援型の際に、T2 の立場で入る時に心がけていることについて」という質問に対し、事前の打合せの重要性を指摘した。その場で考えた指導内容では効果的な指導には繋がらないため、事前にどの児童に支援が必要かを打合せるべきだと述べた。「通常学級と特別支援学級との交流で、障害理解をどのようにしているのか」については、低学年のうちから図工等の教科で交流・協働学習を行い、一緒にいることが当たり前だという環境作りをすることが大切だと述べた。

感想

土屋先生は、初年度から特別支援学級での指導を務める事になり、特別支援学級に在籍する児童への指導の難しさを実感し、効果的な支援のためには、TT 間での共有の重要性を理解することができたそうである。特別支援についてこれからより深く学ぶ私たちに勇気を与えてくれる発表である。(3 年熊谷真響)



2. 鈴木捺美先生(2020年度卒)鈴木先生は、3年目で個別最適な学びと 共働的な学びの重要性について、実践事例を交えながら紹介した。児童 に左右の理解を促すための手立てとして、好きなキャラクターや色など 児童のこだわりを取り入れた例である。多様な障害の児童が、同じ空間 で活動するだけでも協働的な学びになるが、より大きな観点で「学校生 活を送りやすくするにどうすれがよいのか?」考えながら支援を行うの が特別支援学校教員の役目であると述べた(写真は学校内の様子)。

質疑の様子

「生活単元学習など、全体で行う活動の際、児童の実態差が大きい集団に対して、どのように指導を行っているのか。」という質問に対し、普段の生活の中から、子どもたちの好きなことを予め捉えて、共通している点を学習に取り入れていると述べた。学級では、絵の具を使った学習を取り入れ、個別の指導を行う際、筆やスタンプなど様々な用具を準備し、色や塗り方は自由に行っているなどの、また児童全員が好む身体を動かす活動の実践例を交えて回答した。

感想

児童のみならず、先生同士との関係も良好にすることで、よりよい学習環境や支援に繋がることを学んだ。「個別最適な学び」と「協働的な学び」は一見すると相反するものだが、バランスを保つことで児童の指導に有効となると考えられるので、偏らないよう実践していきたい。(3年 須藤遼)

鳩原 潤(東北福祉大学教育学部 准教授)

1 「個別最適な学び」「協働的な学び」は「令和の日本型学校教育」のキーワード

2021年1月に中央教育審議会から『令和の日本型学校教育』の構築を目指して~すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現~(答申)」が公にされた。これまでの我が国の学校教育の優れた伝統や実績を総括し、近年の大規模災害や感染症への対応、急激な社会の変化、我が国が世界に誇るICT等の諸技術の進歩などを踏まえたさらなる学校教育の在り方が提言されている。この副題に「個別最適な学び」「協働的な学び」の文言が見みられ、多岐にわたる学校教育の今日的な課題として重要な内容を有するこの提言内容を貫くキーワードとなっている。

この令和答申では、コロナ禍の下での子供の学びに関して「個に応じた指導」の充実の必要性が述べられており、教師の子供への行為である「指導の個別化」と子供の行為である学習に対する子供一人ひとりのへの教師の対応である「学習の個性化」を示し、これらを教師視点から整理した概念を「個に応じた指導」、子供視点から整理した概念を「個別最適な学び」としている。「個別最適な学び」のためには、カリキュラム・マネジメントの充実・強化、子供理解に基づく指導・支援、そして主体的な学習への支援が求められている。カリキュラム・マネジメントにおいては、学習の定着を図り、その理解を「深め、広げる」としている。また、「発達障害のある児童生徒」など多様な子供への「個別最適な学び」の必要性が述べられており、インクルーシブ教育システムの構築にあたっても「個別最適な学び」は不可欠であるという認識も読み取れる。また、「探求的な学習や体験活動などを通じ、子供同士で、あるいは地域の方々をはじめ多様な他者と協働しながら、あらゆる他者をかちのある存在として尊重し、様々な社会的な変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、必要な資質・能力を育成する」のが「協働的な学び」であるとしている。さらに、「個別最適な学び」「協働的な学び」の両者が密接不可分なであり補完的な関係であることが随所に示されており、「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の要素が組み合わさって」「『個別最適な学び』の成果を『協働的な学び』に生かし、更にその成果を『個別最適な学び』に還元する」などの表現から、両者を組み合わせる、あるいは、往還的に展開するという方法論が読み取れ、それらの組み合わせを「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」という表現でまとめている。

2 カリキュラム・マネジメントのすすめ

特別支援教育の現場では、児童生徒の学びに注目し、日々の授業の充実や年間指導計画等の評価および改善を組織的・継続的に行う仕組みを構築することを目指しており、これは2017年に改訂された新学習指導要領が目指す「カリキュラム・マネジメント」の充実に向けた取組と重なる。各学校では「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」のために、日々の授業実践に基づき教育課程を評価・改善する営みが機能しているのかを改めて見直すことが求められている。

また、特別支援学校における「カリキュラム・マネジメント」では、個々の学習状況を集約し、学習集団に対する教育課程の評価・改善につなぐ視点が必要不可欠となる。個別の指導計画のPDCAと教育課程のPDCAが連動するシステムの構築が求められる。各学校においては、教職員一人一人がこれまで以上により高い意識をもって教育課程について考えることが求められ、人的・物的資源を活用して「カリキュラム・マネジメント」に取り組み始めている。それによって「『個別最適な学び』と『協働的な学び』の一体的な充実」が図られ、全ての子供たちの可能性が引き出されることが期待される。

さらに、各学校が「カリキュラム・マネジメント」に臨むためには、特別支援教育の要であり、特別支援教育の センター的機能を担う特別支援学校に求められる専門性の中核である自立活動について、指導を担う教師の成長 を支える仕組みを構築することが必要である。

「特別支援学級における、個別最適な学びと協働的な学びの実現に向けて」 「ティーム・ティーチング(T・T)の実際」

土屋 晃希 (宮城県仙台市・中田小学校・令和3年度卒)

1. 実践の背景

「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して」の答申で、「個別最適な学び」と「協働的な学び」について提言された。提言の中には、「教師が支援の必要な子供により重点的な指導を行うこと」、「子供一人一人の特性や学習進度、学習到達度等に応じ、指導方法・教材や学習時間等の柔軟な提供・設定を行うこと」(個に応じた指導)などの記載があり、教師による指導の工夫が求められている。特別支援学級において準じる教育課程を編成するためには、指導の工夫という観点で T・T が必要不可欠であると考えることから、本テーマを設定した。

2. 実践の方法・内容

【以下、T・Tの方法を示す】

- ①全体支援型・・・T 1 が全体の授業を進行する。T 2 は、授業の進行に合わせて、適 官、支援が必要な児童生徒を支援する。
- ②個別支援型・・・T 1 が全体の授業を進行する。T 2 は、より支援を必要とする特定の 児童を支援する。
- ③補助型・・・T1が全体の授業を進行する。T2は、T1の動きを支援する。
- ④演示型・・・T1とT2で寸劇などを行う。
- ⑤グループ支援型・・・T1, T2はそれぞれ担当するグループを決め、指導に当たる。

3. 考察

(1) 個別最適な学びの実現に向けた効果的な T・T をするためのポイント

T・Tによる指導をする上で最も重要なことは、様々な情報を教師間で共有することであると考える。 一人一人異なる教育的ニーズを持つ特別支援学級においては、授業全体の目標と個別の目標の二つの目標の達成が求められる。指導に当たる際には、T1が示した全体のねらいを共有するほか、T2が個別のねらいを把握して支援に当たることが必要である。情報共有の仕方については、(I)口頭による伝達、(II) だ道案による伝達、(III) 記録による伝達、などが挙げられる。これらな場面によって使い分はる

- (II) 指導案による伝達、(III) 記録による伝達、などが挙げられる。これらを場面によって使い分けることが、効果的な $T \cdot T$ による指導につながると考える。
- (2) 協働的な学びをより良いものにするためのポイント

多様な他者と協働するためには、良好な人間関係を形成し、児童が安心できる環境を構築する必要があると考える。教師と児童、児童と児童の他に、教師と教師の関係性も円満にすることがより良い協働的な学びにつながると考える。

今回の考察から、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図ることが、今後の課題であると考える。

特別支援学校における個別最適な学びと協同的な学びの実際 鈴木 捺美(岩手県・岩手県立花巻清風支援学校・令和2年度卒)

1. 実践の背景

岩手県の特別支援学校教諭に採用され3年目となる。平成30年に改定された特別支援学校教育学習指導要領にも重要視されている「個別最適な学び」と「協同的な学習」について、日々試行錯誤しながら、特別支援教育における個の力を最大限に生かすための指導・支援に取り組んでいる。これらの実践や取り組みを紹介することで特別支援学校を目指す学生の皆様や先生方への一つの話題提供となればと考え今回の題目を設定した。

- 2. 実践の方法・内容
- (1)特別支援学校における個別最適な指導とは

毎日の学習、日常生活での個別最適化を取り入れた、教材や環境づくりの実践紹介。

国語・算数における個別学習、日常生活での個別支援

実態や場面に応じた環境設定と指導

(2)特別支援学校における協同的な学びとは

生活単元学習の実践を通して、特別支援学校での協同的な学びの視点

- (3)教師のやりがい
 - 3. 考察
- (1)特別支援学校における個別最適な指導とは

特別支援学校では当たり前のように感じてしまう、視覚的な支援や個別的な支援が学校のいたるところにありふれている。その校内にちりばめられている支援の一つ一つが子ども達にとって集中して学習に取り組めたり、安心して学校生活を送ることができたりするきっかけになっていることを改めて感じた。また、ねらいを明確にして支援していくことの大切さが実践を通して実感した。

(2)特別支援学校における協同的な学びとは

様々な障がいをもっている子どもたちがともに学習している特別支援学校の中で、各教科等を合わせた指導である「生活単元学習」からどのような力を育もうとしているのか、授業を考えている時点でのねらいと授業を振り返って実際に育まれた力とを考えることが大切であることを実感した。

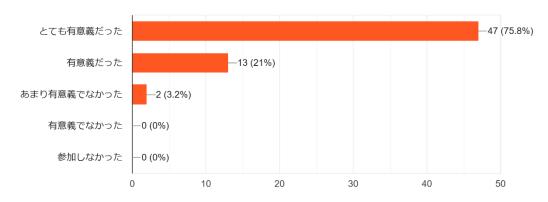
(3)教師のやりがい

日々、子どもと関わっている中で、一番のやりがいは子どもの「できた!」「がんばった!」瞬間を 共に共有できることである。指導・支援をしていく中で、手立てや取り組みをよく考えて実践に移して も、うまく行く時、そうでないとき、様々ある。その中で、「子どもにとって・・・」を一番に考えなが ら、学び続ける教師であり続けたい。

第5分科会 アンケート結果

1 卒業生の話題提供・実践発表は有意義だったか (62件の回答)

卒業生の話題提供・実践発表の内容について該当するものをお選びください 62 件の回答

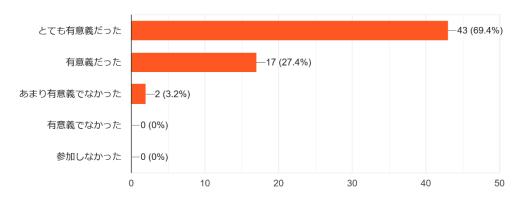


〈ご意見〉

- ・ティーム・ティーチングは、様々な形があるのだとわかりました。また、こだわりの強い 子どもへの支援について、実践例から学ぶことが出来ました。
- ・ティーム・ティーチングの実際や個別最適な学びについて具体例も踏まえながら、実際の 教育現場の様子を知ることができました。
- ・児童の様子や現場でのご指導、工夫を知ることができてとてもよかったです。常に子ども の姿を通して指導の評価、改善を行うことが大切であると勉強になりました。

2 講話について (62件の回答)

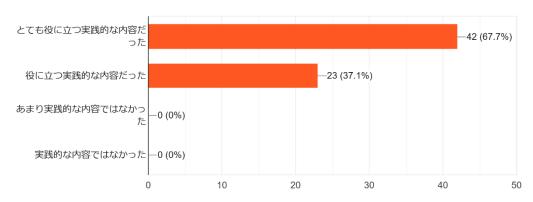
講話について該当するものをお選びください 62件の回答



〈ご意見〉

- ・個別最適を個別快適と変換し考えてみるということに非常に納得しました。
- ・教育課程への視点を持つという、今まで目を向けてこなかった部分に気付かされました。 現場でのより良い教育とは何かを考える上では、指導そのものも当然大事ですが、それを支 える教育課程へのアプローチも考えていくことが必要なのだと感じることができました。
- ・個別最適な学びと協働的な学びについて、子どもたちの願いや気持ちに寄り添った一体化 した教育活動の計画や実施、評価が大事だと学ぶことができました。
- ・他の先生方の発表を聞いた後だったので、それぞれの実践の裏にあるカリキュラムマネジ メントの重要性について学ぶことができました。
- 3 教育現場で役立つ実践的な内容だったか(62件の回答)

今回のフォーラムは教育現場で役に立つ実践的な内容となっていましたか 62件の回答



〈今回のフォーラム全体についてご意見・ご感想を自由にお書きください〉

- ・質疑応答が活発に行われており、とても有意義な時間を過ごすことができたと感じました。
- ・実際に先生方からお話を聞くことが出来、具体的イメージが湧きました。子どもにとって より良い指導や支援を行うことの大切さを改めて学びました。
- ・実行委員の学生さんがとてもスムーズに会を進めていて、これまでたくさん準備されてきたことが感じられました。オンラインで参加されている方との連携もスムーズで、進行の仕方も勉強になりました。お疲れ様でした。

TFU 教育フォーラム 2023 総括

総括に代えて 魚の楽しみを知る

TFU 教育フォーラム 2023 実行委員長 杉浦 徹

多くの方のご協力を賜り、第 12 回 TFU 教育フォーラムを無事開催することができた。600 名前後の参加者があった。短時間ではあったが、5 つの分科会では熱心な議論が交わされた。その準備を担当させていただいた者としては、大きなトラブルもなく終えられたことに、まずはほっと胸を撫で下ろしている。

準備段階から感じていたことではあるが、教育という領域の多様さ、その扱う現象の広さと大きさを 改めて目の当たりにした感がある。理論と実践、哲学と技術等、それらが幾重にも交錯し、また時には 相反し合いながらも物語を構築している。実践報告をお聞きしていていると、教室の中で児童生徒と教 師が作り出す物語は小さくはあるが、さながら1つの宇宙であるように感じた。

そんな思いに駆られていた時、ふと学生時代に読んだ道家の書「荘子」の一節を思い出した。こんな話である。

荘子と議論好きの恵子がいっしょに川のほとりを散歩していた。橋の上に差し掛かった時、荘子が言った。「魚が悠々と泳いでいるよ。あれが魚の楽しみというものだね。」

すると恵子はたちまち反論した。「君は魚ではない。魚の楽しみがわかるはずがない。」莊子は言う。 「君は僕ではない。僕に魚の楽しみがわからないということが、どうしてわかるのか。」

恵子はここぞと言った。「僕は君じゃないから、もちろん君のことはわからないさ。同様に君は魚じゃないんだから、君に魚の楽しみがわからないのも当然じゃないか。|

荘子は言う。「話を最初に戻そう。君は『君にどうして魚の楽しみがわかるのか』と尋ねた時、もうすでに僕が魚の楽しみがわかっていると知っていて、問いかけたんだよ。僕は橋の上で魚の楽しみがわかったのさ。」

さて、みなさんは荘子と恵子どちらが正しいと思われるだろうか。恵子は「論理的に実証できない事象は一切認めない」とし、一方、荘子は「事象の存在が論理的に完全に否定できないのであれば排除しない」という。

教育研究の世界は近年ますます発展し、単なる主観を排し、より客観的なエビデンス重視する傾向にあり、その方法論も徐々に確立されつつある。それ故、教育に係るものは恵子の意見を取るべきなのかもしれない。しかし、同時にふと荘子の立場にも共感したくなる。実証不可能な現象だから「君は子どもではない、だから子どもの気持ちがわかるはずがない」と言えるだろうか。「自分は教師で、大人で、子どもではない、けれど子どもの気持ちがわかる」ことを強く願うことも大事なのではないだろうか。

教育研究が発展している一方で、実際の教育現場の課題は年々複雑化し、混迷の極みを尽くしている。 残念ながらその解決に研究が実証可能で明確な回答を出せているとは言えない。ひょっとすると大事な ことは、旗幟鮮明に論理と感覚、主観と客観どちらかに与するのではなく、一見対立する構造から逃げ出 し、時には相互の間を蝶のようにひらひらと飛び回ることなのではないだろうか。 在校生、卒業生、教員等、すべての日常の立場を捨て、年一度、縁のある国見の校舎に集まり、過去と今、未来に思いを馳せ、教育に関する議論を楽しむことに意義がある。そんな場にフォーラムが位置づけばよいのではないかと思った。今年度の開催に関わる様々に感謝しつつ、次年度の盛会を心から祈念する。

引用・参考文献

福永光司・興繕宏 訳「荘子(外篇)」 ちくま学芸文庫 2013 湯川秀樹 「知魚楽」(「驚くこころ」 ちくま哲学の森 425—430) ちくま文庫 2012

学生実行員名簿

本教育フォーラムは、各ゼミ代表者から選出された学生実行委員によって 10 月に学生実 行委員会が立ち上げられ、多くの係を分担し運営されました。

担当	学籍番号	学生氏名	所属ゼミ	備考	
委員長	21ET012	安倍 優衣	杉浦ゼミ		
副委員長	21ET036	大沼 耕己	伊勢ゼミ	司会(小学校 B)を兼任	
誘導	21ER038	村井りお	大西ゼミ	記録(特支)を兼任	
	21ET063	熊谷真響	黄ゼミ	記録(特支)を兼任	
	21ET129	須藤遥	村上ゼミ	記録(特支)を兼任	
	21ET187	三浦冴鳳	茂木ゼミ	PV(特支)を兼任	
幼保 司会進行	21ET099	佐藤 真衣	石森ゼミ		
	21ET115	庄司 和香	高野ゼミ		
幼保 記録	21ET113	下舘 瑛佳	山﨑ゼミ	受付(幼保)を兼務	
	21ET135	高田 奈々	河合ゼミ	文刊 (4)1末) 老飛術	
	21ET022	岩城 綾音	青木ゼミ	Web/PV(幼保)を兼務	
	21ET199	安田 佳音	平川ゼミ	Web/FV (刘林) 飞林场	
小学 A 受付	21ET052	金田 優	渡会ゼミ		
	21ET076	小針 一穂	渡会ゼミ		
小学 A 記録	21ET094	佐藤 泉	上條ゼミ		
	21ET102	佐藤由瑞穂	上條ゼミ		
	21ET190	三塚 麻由	加藤ゼミ		
小学 A Web/PV	21ET092	佐々木莉子	白井ゼミ		
小学 B 司会進行	21ET015	伊藤くるみ	伊勢ゼミ		
	21ET036	大沼 耕己	伊勢ゼミ		
小学 B 記録	21ET040	岡崎 佑也	水野ゼミ	・小学B受付を兼務	
	21ET070	後藤 翼斗	三浦ゼミ	小子D支削を飛笏	
	21ET179	藤田龍太郎	佐藤 (郷) ゼミ		
小学 B Web/PV	21ET077	駒形 将俊	今野ゼミ		
中高社 司会進行	21ER020	熊谷 里菜	下山ゼミ		
	21ER026	高橋 凛	下山ゼミ		
中高社 記録	21ER004	阿部 和生	朝倉ゼミ		
	21ER024	佐藤 里衣	門脇ゼミ		
	21ER025	佐野 雄大	浅川ゼミ		
中高社 Web/PV	21ER001	相沢 駿斗	冨樫ゼミ		

担当	学籍番号	学生氏名	所属ゼミ	備考	
中高英 司会進行	22ER099	小笠原由馬	伊勢ゼミ		
	22ER012	鎌本圭史郎	黄ゼミ		
中高英 記録	22ER029	千葉慎一朗	中林ゼミ		
	22ER031	中村 元	佐藤 (郷) ゼミ	受付(中英)を兼務	
	22ER042	吉田 開	久保田ゼミ	Web/PV (中英) を兼務	
特支 司会	21ET010	阿部 笑弥	杉浦ゼミ		
	21ET023	岩佐菜保子	大西ゼミ		
特支 記録	21ER038	村上 りお	大西ゼミ		
	21ET063	熊谷 真響	黄ゼミ	誘導を兼務	
	21ET129	須藤 遥	村上ゼミ		
	21ET097	佐藤駿太朗	庭野ゼミ	受付(特支)を兼務	
特支 受付	21ET212	若井更紗	杉浦ゼミ		
特支 Web/PV	21ET187	三浦 冴鳳	茂木ゼミ	誘導を兼務	
	21ET206	山本 紗香	和ゼミ		

合計 39 名

TFU 教育フォーラムのあゆみ(2012 年度~2023 年度)

実施月日/参加者数/特記事項	大会テーマ・主な内容等
子ども教育フォーラム 2012	テーマ:つながりのある保育・教育を求めて
8月18日、参加者:300名	第1部:基調講演
,,	「教材でつながる、教材をつなげる」
卒業生のリカレント教育	東北福祉大学 西林克彦教授
として教育フォーラムを	「保幼小連携の枠組み‐実際と展開‐」
開始	神戸大学大学院 北野幸子准教授
<u> </u>	第2部:ワークショップ「ワールドカフェ in TFU」
	担当者:三浦和美(子ども教育学科・教職)
TFU 子ども教育リカレント	第1部:記念講演
講座 2013	「考えてみよう 眠りのこと ~どんな時に眠くて、どんな
10月19日、参加者:150名	時に眠くない?~」 東北福祉大学 水野康准教授
分科会形式の運営を開始	第2部:分科会(保育対象・教職課程)
カイスが八の座台を開始	担当者:小石川秀一(子ども教育学科・教職)
TFU 教育フォーラム 2014	第1部:記念講演
10月11日、参加者:155名	「算数のたのしさ」 東北福祉大学 石原直教授
	第2部:分科会(保育対象・教職課程)
	担当者:土生昭文(子ども教育学科・教職)
2015 年 4 月 教育学部教	育学科・大学院教育学研究科発足により共催実施
TFU 教育フォーラム 2015	第1部:記念講演
10月3日、参加者:800名	「子どもも大人も居心地の良い学校、家庭、地域社会をめざ
初めて中央講師迎え開催	して」
学科と大学院共催を開始	教育評論家・法政大学教授 尾木直樹先生
子付と八子帆共催を開始	第2部:分科会(保育対象・教職課程)
	担当者:熊谷和彦(初等教育専攻・小学校)
TFU 教育フォーラム 2016	第1部:講演
11月6日、参加者:390名	「特別支援教育の動向」 東北福祉大学 大西孝志教授
	第2部:分科会(保育対象・教職課程)
	担当者:熊谷和彦(初等教育専攻・小学校)
TFU 教育フォーラム 2017	第1部:講演
10月14日、参加者:100名	「空がこんなに青いとは わたしの初人験」
1	
	東北福祉大学 土生昭文准教授
	東北福祉大学 土生昭文准教授 第2部:分科会(保育対象·教職課程)

TFU 教育フォーラム 2018	大会テーマ:主体的・対話的深い学びを目指して 子どもの		
12月8日、幼保:323名	学びをどう幅広く支援するか		
10月6日、教職:174名	大会テーマを設定し各分科会を実施。		
	中等部会新設。		
	担当者: 今野和賀子(初等教育専攻・小学校)		
TFU 教育フォーラム 2019	大会テーマ:主体的・対話的深い学びを目指して		
12月14日、幼保:427名	子どもの学びをどう幅広く支援するか		
	10月12日、教職:台風19号により中止		
	担当者:浅川俊夫(中等教育専攻・社会)		
TFU 教育フォーラム 2020	大会テーマ:主体的・対話的深い学びを目指して		
11月28日	子どもの学びをどう幅広く支援するか		
	新型コロナウイルス感染症拡大により中止		
	担当者:高屋隆男(特別支援教育)		
TFU 教育フォーラム 2021	大会テーマ:ポストコロナへの志向		
12月4日、参加者:655名	- すべての子どもの確かな学びを目指して-		
感染症対策のためオンラ	5 分科会(幼保・小 A・小 B・中・特別支援)で開催		
イン開催	担当者:渡会純一(初等教育専攻・小学校)		
ii			
TFU 教育フォーラム 2022	大会テーマ:ポストコロナへの志向		
12月3日、参加者:603名	- すべての子どもの確かな学びを目指して-		
対面・オンラインハイフ	6 分科会(幼保・小 A・小 B・中高社会・中高英語(新設)・		
レックス方式による開催	特別支援)で開催		
	担当者:冨樫進(中等教育専攻・中高社会)		
TFU 教育フォーラム 2023	大会テーマ:個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実		
12月2日、参加者:629名	を目指して		
対面・オンラインハイフ	5 分科会(幼保・小 A/B・中高社会・中高英語・特別支援)		
レックス方式による開催	で開催		
L	担当者:杉浦徹(特別支援教育)		